昭和48年１月７日発行通巻95号(毎日曜日発行)　昭和46年２月５日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日＝ラルース

1/7·14
220円

94

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〟は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（２），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《１～128号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけでなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〟として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〟全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表３「本誌の購読について」をごらんください。

目　次

世界動物百科　第94号

カラーページ

私たちの仲間

表紙　コキンメフクロウ　Ph. Okapia
表２　**日本迷鳥録**　キアオジ

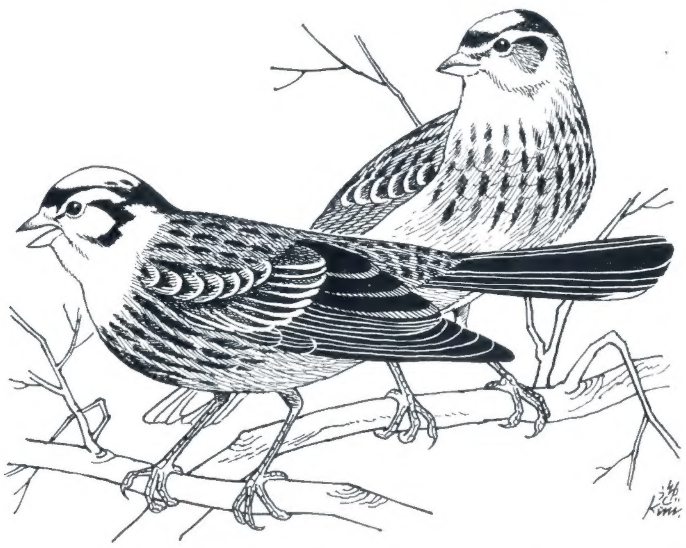
監修　森岡弘之（国立科学博物館研究官）
翻訳　大沢寛三（本誌編集部）

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注１〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆　29

キアオジ

Emberiza citrinella



文　内田康夫
え　木村しゅうじ

前回のズグロチャキンチョウときわめてよく似た事情にあるのがキアオジである。全長約17センチ，わが国のアオジに似てやや大きく，全体に黄色みが強いこと，頭部の地色が黄色で腰がレンガ色をしていることが特徴である。林縁や林間のかわいた草地，畑などにふつうで，分布は，全ヨーロッパからバイカル湖西岸の東経105度付近まで及んでいる。

一方，シラガホオジロという鳥がおり，オホーツク海西岸からオビ川上流の東経70度付近まで分布している。雄の頭部は白とくり色の縞状で，キアオジとは外見上かなり違っているにもかかわらず，両者の分布域が重なっているエニセイ，オビ両大河流域で，交雑が起こっている。このため，両種を同種と考える見方と，両種の習性上の相違から別種とする見方とがある。キアオジの記録は1935年12月長野県で雄１羽の１採集例だけである。■

南国闘牛風土記

どろくさく　うしもたたかい　ひともたたかう



定期場所は
年5回行なわれている
このときは
ウシも勢子もウシ主も
一体となって
必死の勝負を展開する

5億年とかいう動物たちの歴史から見れば，年が改まったなどということは問題ではありません。しかしまあ，そうはいっても，正月ぐらい干支のおつき合いでくつろいでもいいでしょう。

まっ黒な雄ウシが，つの突きあって格闘する，滑稽でいながら，ちょっぴりもの悲しい闘牛のお話です。

「出せー，出せっ」

行司の呼出しの声で，勢子に引かれた2頭の巨大なウシが登場する。それぞれが250貫（1トン弱）もある横綱ウシだ。

土俵中央に駆けよった両牛は，勢子が鼻緒を抜くまもなく，「ガッツィーン！」とつの突きあわせる。見ている者のはらわたにまで響いてくるような，ものすごい音だ。前あしを多少折り曲げるようにし，頭を低く下げる。そして全体重を20センチにもなろうというようなつのに集中し，それをたがいにからみ合わせたまま，2頭とも微動だにしない。

このときのウシの力がどれくらいなのか，はっきりしたことはわからない。だが，引き分けのときなどには，勢子がそれぞれ10人くらいずつウシにまとわりつき，つのや尾を引っぱるのだから，相当なものだろう。

◇横綱の力，まさに抜群◇

このメーンエベントに先だつ過程は，人間がやる大相撲とほとんど同じ。だから，闘牛などといわずウシ相撲，あるいはウシ角力といったほうがよい，という意見もあるくらいだ。

まず，三役以上の役ウシによる土俵入りが行なわれる。といっても不知火型も雲龍型もあるわけではない。油単（ベビー毛布のようなもの），打掛（化粧まわしに相当するもの），紅白の左巻き（太いしめ縄のようなもの）で正装したウシがウシ主や勢子に引かれて，土俵内を3度ぐるぐるっとめぐり歩くだけの儀式である。これでは，大相撲で見られる，大関以下の土俵入りのほうが，まだまだ愛嬌がある。「パン」と手を打ったあと，まわしをちょっと持ちあげるところなど，実に傑作だと思う。

それから取組が始まるのだが，ランクが下の前頭からはじまり，小結，関脇，大関，横綱という順に進んでいく。このランクも，対戦成績，勝率によって決定されていくのだから，大相撲とまったく同じだといえる。ただ横綱ウシはつねに9割以上もの勝率を誇っているし，大関も7，8割でないとだめだという。

そして，闘牛と大相撲の決定的に違うところは，けっして前頭―大関，小結―横綱というような取組がないことである。これは，力の差があまりにはっきりしていて，全然勝負にならないからだ。なるほど，前頭と横綱とでは，親子ほども体格が違うのだ。

◇勢子の奇声で猛然ハッスル◇

さて，横綱どうしの対戦にもどろう。3分，5分と時が過ぎ，しだいにウシたちの腹が大きく波打ちはじめる。それぞれの勢子がくびや背，尻をたたいてウシをけしかける。

「ソレッ，イケイケ，ホーレソレッ」

ウシは渾身の力を振りしぼって，押したり突いたり，一進一退を繰り返す。

と突然，変声期に無理しすぎたターザンの雄叫びのような，「トゥェー，ツェー，トゥェーッ」という，最小限見積もっても，いままでより1オクターブははね上がった声が起こり，勢子がところかまわず，ウシのからだをあちこちひっぱたく。するとウシのほうも心得たもので，いまが攻めどきと思うのか，あるいは打ちすえられた怒りを，スジ違いではあるが相手に爆発させるのか，猛然と目をむいて突きまくり，押しまくる。

ただやみくもに押しているようだが，闘牛の基本10技という大相撲の48手に相当するものが，ちゃんとあるのだ。たとえば，向こう突き（まっこうから相手の額を突く），ヒラ（相手の横からくび，前あしのつけ根を突く），横掛け（相手のわき，横腹を突く），もみこみ（きりもみのように相手の頭を掘るように突く），チャツリ（つのを小さく上下させて相手の頭を突く）などがそれである。しかし，これら10手をすべてこなせるウシなどほとんどなく，ウシの体格や性質によって，2，3の得意技をもっているにすぎない。

一方，守勢にまわった側は苦痛に顔をゆがめ，じりじり後退しながら反撃のチャンスをねらっている。勢子も，「ヨシ，ヨシ，ベコ（ウシのこと），ヨシ」などといいながら，背やくびすじを力強くゆっくりたたいて，こらえさせる。

こうして攻勢から守勢へ，守勢から再び攻勢へと攻めあい，押しあいが繰りひろげられる。素人目で見た闘牛の魅力の一端はここにある。頭を低く下げ，砂を後ろに蹴りとばしていかにも強そうなポーズをするが，からきし弱いウシ，はじめから何か無気力なウシ，猛然と攻めまくるが守りにまわると，ころりとまいるウシ，攻められても攻められてもじっと耐える受難者のようなウシ，豪快そのものに終始一貫強いウシと，さまざまなウシが登場し，人間模様を見るようなおもしろさがある。

◇熱戦の幕切れ，意外に淡白◇

横綱ウシの面目を賭けた戦いは，すでに20分を経過した。さしものウシもヨダレをたらしはじめ，サファイアとアメジストを混ぜたような青紫色の瞑想的なひとみも，いつしか真っ赤に充血し，獰猛残忍，ものすごい形相になっている。勢子はすでに数人が交替し，ウシの尻をたたきつづける。ウシは休むどころか，力みっぱなしなのである。

尾籠な話になるが，だから長く戦うと，ウシは下痢症状を起こすという。なかには神聖な土俵をよごしてしまう不届きウシも出てくる。イヌなどのように，その姿勢をとらないのだから，見ているほうは何事かと思い，じっと見つめてしまう。すべてを見終わってからオエーッということになるのだ。まあこれもウシにしてみれば，「イザ，ベン，ダサン」と思ってやるわけではないだろう。

試合前に，ウシのつのはヤスリで鋭くとぎすまされる。これで何度も何度も突きあうのだから，頭部には血がにじみ，

油単　内掛　左巻きを身につけた正装で土俵入を行なっている佐々木ウシ





戦い直前まで　大まわしはくびにつけられている

横掛けやヒラをくわされたウシなどは、くびすじや腹が突きやぶれ、血が吹きだしている。

かれこれ30分も戦ったであろうか、数度めのターザンの雄叫びが起こった。今度は雄叫びが少し長いようだな、と思って見ていると、ググーッと土俵ぎわに押しこまれたウシが、まったくなんの前触れもなく、プイとそっぽを向き、相手を残したまますたすたと土俵内をめぐりだした。巨漢力士がなんの抵抗もみせず、あっさり土俵を割ってしまったときのようなもの足りなさがある。

見物人のあいだから「あーあっ」というため息と笑いが起こる。ところがおさまらないのは勝ったほうのウシである。欲求不満を露骨に示し、「お前逃げるんかい、ようやらんヤツかいね。ワシはまだまだやる気があるぞなし」とでもいってるのだろう、「モォーブホー」とほえたてる。そして、ブルッとくびをけいれんしたように振り動かし、灰黒色の舌を突きだして、ヨダレを左右にまき散らす。

しかし闘牛の勝敗はこれで決したのである。一度戦う気力をなくしたウシは、もう二度とその相手と突きあわない。ただ、ひたすら逃げるだけだ。だから、闘牛の勝敗はひとえにウシの気力にかかっている。戦う意志さえあれば、いつまでも続くことになる。いままでの最長時間は2時間15分、水入りなしというのだから、これはもう、見ているほうが、うんざりしてしまっただろうと想像される。

闘牛のひと結び（ひと勝負）は、これで終わったわけなのだが、このあとがまたおもしろい。それは、興奮さめやらぬ1トンものウシを取りおさえる勢子の動きである。4,5人の勢子が土俵内にはいり、逃げまわるウシやそれを追いかけるウシを取りまく。ぼんやりしていて、はねとばされる者もいるが、かれらはウシの急所を心得ていて、決してウシを恐れない。片手でつのを１本握り、もう一方の手（親指と他の４本の指）をウシの鼻にさし込む。「牛耳を執る」などというが、「牛鼻を執」られると、ウシはとたんにつきものが落ちたみたいになってしまう。それからこよりのようなひもを鼻に通し、大まわしといわれるくつわのようなものをはめ込む。ウシは、いままでいったい何をしていたのだろう、さっぱりわからんといった顔つきで、勢子に引かれて土俵を去っていく。

◇素朴ゆえの魅力◇

それでは、このような闘牛はいったいどんな場所で行なわれているのだろうか。昨年11月、抜けるように青い空と緑の山々、その緑の地に斑点をなすようにミカンが黄色く色づいていた南予宇和島市の一隅に闘牛場はあった。谷間に赤土が露出していて、数十本の木の杭、錆ついた鉄柱が打ちこまれ、その間を３本の竹矢来が仕切る。直径15～20メートルほどのそこが土俵である。土俵周辺には、どさ回りの芝居小屋にでも立てかけてありそうな幟がひるがえり、それに何某菊之丞や何某梅之助ではなく、ウシの名が染めぬかれていた。宇和島の闘牛ではウシに四股名はなく、ウシ主の姓や、ウシ主が商家の場合など、その屋号がつけられているのだ。赤や黄や青の、いくぶん色さめた幟である。はなやかでいて妙にうらさびしい。

見物人は土俵を仕切るそまつな柵の周辺と、三方の小高くなった丘のようなところにある席に、かって気ままに腰をおろすのである。弁当持参の老人と孫、若い男女、コップ酒をくみかわしながら観戦する男たち。自分のひいきのウシには金も賭けているのだろう、酔うほどに、男たちのことばは荒くなっていく。行司が長びいた勝負の引分けを宣言しようものなら、「ナニサラスネン、ヤラセ、ヤラセーッ」と罵声が飛ぶ。

古代ギリシャでは、アンフィ・テアトル（屋外円形劇場）でペルソナ（仮面）をつけた俳優たちが、喜劇、悲劇を演じて市民の喝采を浴びたし、ローマ帝国では、コロセウムのような闘技場で剣闘士やキリスト教徒が、貴族の慰みものになったりした。また、スペインや、ラテンアメリカの国々では、壮大な闘牛場でマタドールが華麗なケープさばきを見せる。

宇和島の闘牛場にも、同じように娯楽を求めて人びとが集まる。だが、西ヨーロッパのそれとは、どこか違っているようだ。闘牛場が貧弱だからだろうか。いやそうではない。壮大な闘牛場ができたら、突きあい（地元では闘牛のことをこう呼ぶ）は、逆におもしろくなくなってしまうのではなかろうか。

宇和島の闘牛の由来は、あんまりはっきりしない。鎌倉時代からとも、400年ほど前に宇和海に漂着したオランダ船を救助し、その礼としてもらった２頭のウシの闘いが始まりともいわれている。しかし、なにはともあれ、娯楽の少なかったこの地方の農民が、正月や取りいれも終わった秋祭りの際に、畑のまん中で農耕ウシをたがいに突きあわせ、部落の老若男女が打ち興じたことにまちがいはないだろう。しかもそれは、より農耕に適したウシを生みだすことにも通じていた。つまり、生活のなかから娯楽を生み、娯楽のなかから生活を向上させる術を見いだすという、実に合理的でむだのない、農民の知恵なのであった。

こうした事情で現在まで続いている闘牛には、壮大な闘牛場など、本来の姿をそこねこそすれ、なんの益にもならないだろう。現在、日に日に失われつつある自然と人間、動物と人間との融和が、この闘牛に息づいているのだ。だから、闘牛の魅力は、泥くさく、滑稽で、陳腐で悠長で残酷な、ふつういえば欠点となるところにある。そこにまた、哀感があり、郷愁を呼びおこすものがあるのだ。

◇ウシ主もつの突きあう◇

ところが実際には、闘牛はむしろ逆の方向に進もうとしている。



番付表を囲んでウシ主たちは　持ちウシの自慢話や戦いの予想に花を咲かせる

過疎に悩む宇和島市では、昨年11月、足摺国定公園が足摺宇和海国立公園へと昇格したのを期に、2000万円をかけ屋内闘牛場をつくる動きがでてきた。

闘牛は何も宇和島だけで行なわれているわけではない。新潟県小千谷市の山古志地方には、江戸時代から続く闘牛があり、鳥取県の隠岐島でも約700年前、流島の後鳥羽院を慰めるため闘牛が起こったといわれ、現在も続いている。沖縄県や八丈島でも古くから行なわれているという。

本家争いなどよりも、設備を整え、宣伝これ努め、ウシ主を援助することが第一とばかり、宇和島市は闘牛を観光の柱にして驀進してきたのである。

ところが一昨年５月、ウシ主どうしの対立が表面化し、それまで南予闘牛連盟の名のもとに、市当局と歩調をあわせて観光闘牛に取り組んでいたウシ主たちが南予闘牛連盟（佐々木竜夫会長）と宇和島地区闘牛協会（近藤広海会長）とのふたつの組織に分裂した。これは、市の商工観光課にとっては、まことに痛かった。

それまで、観光闘牛に使う目的で３歳以上のウシを購入する際には１頭当たり５万円の購入補助金、月5000円の飼育補助金をだして、しだいに減っていくウシ主の援助と闘牛ウシの確保をはかっていたのが、すべて御破算になってしまった。

連盟、協会の対立は激しく、どういう手段を使ったのか、片方が相手側の横綱ウシを購入した。そしてそれと自分の側の関脇ウシ２頭を次々に戦わせるという「２頭突き」なるものをやったところ、１頭めの関脇ウシに、その横綱ウシが負けてしまった。すると、「それみろ、ワシらのウシのほうが、ずっとレベルが高いぞなし」と相手側に毒づく。相手も黙ってはいない。「あちらの観光闘牛は５分もよう戦わせん。ワシらは、20分はじゅうぶん戦わせるぞなし」とこきおろす。こんな騒動が続いているのだ。

◇期待されるウシづくりとは◇

こんなウシ主たちの悶着も、いっこう気にならないのがウシだろう。人間の突きあいをよそに、悠々と食べ、眠り、戦うのだから。真っ黒くビロードのような毛並みをもつ200貫以上の巨軀は、どうやってつくられるのだろう。

宇和島市で現在飼育され、闘牛に使用されているウシの多くは黒毛和種（Japanese Black）といわれるものの雄だけで、ほとんどは九州、とくに大分県で人工授精によって生まれたものだという。もともとは肉牛にされるためのもので、血統書も何もない。

そして、わずか１歳ほどのときにセリ市にかけられ、闘牛用になるだろうということで馬喰に買われ、南宇和島郡御

荘町近辺の農家に連れてこられ，牛舎で３か月間ほどつのに強力なゴム輪をはめられ，つのがまっすぐ上にのびるように矯正される。これはもう，まったく戦うためだけに要求される条件だ。

そして２歳くらいになると，序ノ口クラスということで細い（小さく若い）ウシどうしで戦わされる。宇和島市にいる50人ほどのウシ主たちは，欠かさずこうした細いウシどうしの戦いを見にいき，ウシの闘志，からだつきなどを見きわめ，3,4歳で150貫ほどのウシを購入する。それはウシ主と農家との直接交渉なのだが，だいたい１頭40〜45万円だという。それから横綱ウシ目ざして，よりいっそうの訓練が行なわれ，みがきがかけられるのだ。

ところでウシの年齢だが，６歳までは歯によって数える。ウシには前歯が８本あり，乳歯が永久歯にはえかわるように，中央から２本ずつが抜け，はえかわる。しかし，毎年２本ずつはえかわるわけではなく，ウシによっては４か月ではえかわる場合もあり，結局８本すべてがはえかわったとき「もげ６」と称して，このとき６歳とする。それからは365日を１年として，人間に歩調をあわせて勘定される。だいたい横綱ウシになるのは早くて６歳であり，「８歳の秋を見よ」ということばがあるように，８歳くらいが全盛だという。それから廃牛として肉屋行きになるのが12〜14歳。もっともこれは横綱ウシの場合で，弱いウシはその前に淘汰されてしまう。

それではウシにとっての長生きの秘訣，つまりは「横綱ウシになるための方法叙説」とは，いかなるものだろう。それは，試合中の勢子のテクニックであり，もって生まれたウシの根性と体格であり，最後に平素の訓練，健康管理なのである。

平素の訓練とは山歩きである。バーベルを持ちあげたりエキスパンダーを引いたりする必要はまったくない。万歩運動こそが訓練で，平素は１か月に２,３度，山道を４〜８キロ，前あしにワラぐつ（ウシ用のワラジ）をつけて歩く。するとウシは，上りでは力を入れ，下りでは力を抜く。こうして緩急強弱に対処する訓練をすると，これが短時間に機敏な動作が要求される闘牛に有益なのだそうだ。

そして試合の40〜50日前になると，１日おきにこの訓練をし，１週間くらい前では，平坦地を1,2キロ歩いて，足ならしをする。

次に健康管理だが，ウシ主たちはここにいちばん頭を使う。「闘牛は世話が第一やけんな」と。ふつうは１日にオオムギ7,8升，コムギを３升，それにわらや草を与えているのだが，試合前20日ほどからは，ムギにかえて米やもち米をすりつぶして与え，卵を10〜20個，ビール１本，あるいは酒２合ほどを食らわせる。牛飲馬食とはこのことだろう。しかも気の弱いウシにはマムシをすりつぶした粉末を米に混ぜたり，ニンニク粉，あげくのはてにはグロンサン，救心などといった疲労回復剤，強心剤を与えるという。



和霊土俵での観光闘牛は
ひと結びが約30分ほどで
2万円
引き分けやすいように
鼻緒は
つけたままで行なわれる

しかもウシ主たちはウシの日常生活，健康状態に細心の注意を払っており，目がトロンとしていれば疲労ぎみだと気をつかい，鼻がかわいていれば病気なのではと気をもみ，耳やつのが冷たければ風邪をひいたと大騒ぎをする。自分の子に優るとも劣らない気の配りようだ。

◇愛情か経済性か名誉か◇

以前，ジャン・リュック・ゴダールの監督になる『女は女である』という映画があり，そのなかで男が女に結婚を求める。女は愛してる証拠を見せてくれたら，という。そこで男は陳腐なことをやって見せるのだが，女が納得しない。ついに男は，壁に思いきり強く頭をぶつけるから愛していることを信じてくれといい，壁に突進するという場面があった。ところがそれは，結局なんの証にもならなかった。

ウシ主たちが，闘牛が好きで，ウシが好きだということを説明しようとすればするほど，そのことから遠くなっていくのかもしれない。生まれてからずっと闘牛を見，ウシとともに暮らしてきたことで養われた愛情は，ちょっとやそっとでは説明できないだろうし，人を納得させうるものでもないだろう。

それではと，ゲスの勘ぐりで，闘牛というのはもうかるものなのかと考えてみた。ところがそれが全然違うようなのだ。

宇和島市では年５回の定期場所（１月２日，４月，７月24日，９月，11月）と，年間60回ほどの観光闘牛が行なわれている。そして定期場所の場合，横綱ウシの対戦で，勝ちウシに２万円，負けウシに３万円が支払われ，大関ウシでは勝ったほうが１万円，負けたほうが２万円と，こんなぐあいに支払われている。反対じゃないのと思うだろうが，負けたほうのウシは次の買い手がつかず商品価値が下がってしまったのだから，こうした取決めでウシ主を擁護しているのだそうだ。ただ観光闘牛の場合は勝ち負けに関係なく，ひと結び6000円ずつウシ主に支払われる。

しかし，一度戦えば２か月は休養しなければならない大食らいのウシをかかえ，闘牛に勝ってもたいしてもうからないとなると，ウシ主はどうしてウシをもっているのか，ますますわからなくなってくる。

いやまて，ウシの仲買いをやればもうかるのではないか。現在横綱ウシの相場は100万円は下らないそうだ。だから農家から40万くらいで買って，それを横綱にしたてれば，かなりもうかるのではなかろうか。

しかしこの推定も，ある老人に会って話を聞いてみたら，もろくもくずれてしまった。その老人は５歳のウシを持っていた。それは現在まで連戦連勝負け知らずの，あと１,２年もすれば横綱まちがいなしというウシだった。老人はいう。「ワシに横綱をもたせて死なせてくれや」と。「何十万，何百万積まれても，このウシを手放すつもりはないぞなし」。

一方，3,4歳で農家から40万円ほどで買ったウシが闘牛に使われ，あげくの果てに廃牛になるときには，200貫もの重さがあっても30万円ほどにしかならないそうだ。筋肉ばかりで肉がかたくなってしまっているからだという。

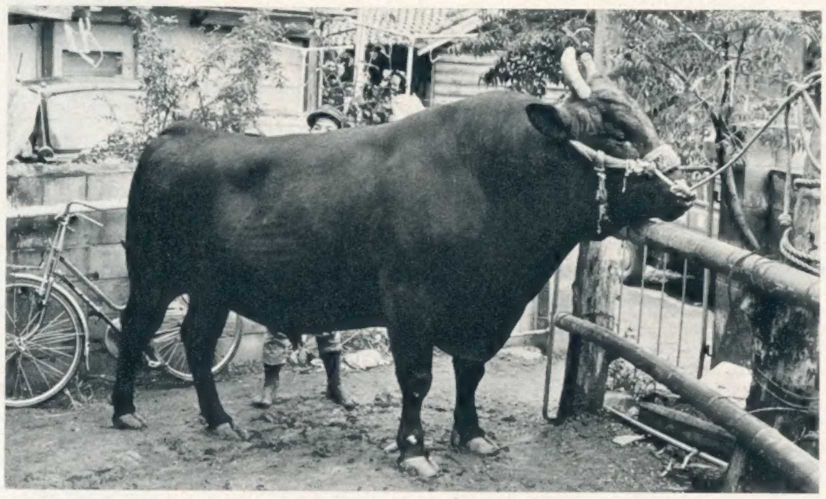
結局，闘牛でもうけることはほとんど不可能のようだ。よくいってトントンというところだろう。

それではと，強いウシを持つことがそれほど魅力あることなのだろうかと聞いてみた。ウシ主たちは一様に，そうだという。強いものに対する憧憬の念は深い。確かに仲間うちでの評価は，強いウシを持っているものほど高い。そしてウシ主は，場合によっては金銭を度外視してまでより強いウシを求めて狂奔する。

しかし，一般の人の闘牛に対する関心はさほど高くはない。「ウチら，闘牛なんて，よう知らんぞなし」「どげな人がウシ持ってるんやら，よう知らんけん」。

娯楽は年々多様化してきており，闘牛という娯楽も，それだけが唯一の娯楽であった時代に育った人たちだけの，滅びゆく娯楽といえないこともない。それにウシという巨大な生きものを飼育し訓練する場所もなくなりつつあるし，それができる人びとも減りつつある。本来の姿を見失って，闘牛はいったいこれからどうなるのだろうか。

「ことしはウシ年じゃけん，きばらにゃいけん思うとったが，こりゃまあ，いったいどうなるんかいの。食べてすぐ寝て，ウシウシ，どころじゃないぞなし」■　（鮎川記者）



体重275貫という宇和島最大の近藤ウシ　背の盛りあがった力こぶが力強さの象徴

アマゾン動物記 6

伊沢紘生

密林の覇者　その2

≪2度めの出合い≫

たぶん同一と思われるシロクチペッカリーの大集団に2度めに出合ったのは12月10日だった。この日は朝からクロクビタマリンの群れ，リスザルとフサオマキザルの混群，ウーリーモンキーの群れ，そして再びリスザルとフサオマキザルの混群に続けて出合い，根を詰めた観察でいささか疲れを感じはじめていた。時計は11時を少し回っていた。

最後のリスザルとフサオマキザルの混群にしばらくひとりでついていって，サルたちの移動方向を確実に押え終わり，その先の観察路に抜け，後方で待たしてある助手のヒルベルトを呼んだ。しかしかれからの応答がないので，そちらのほうへオオオオハシのおどけた鳴き声を口笛でまねながらゆっくりともどっていったら，突然，前方20メートルぐらいの所から，シロクチペッカリーの「グヴゥッ・——・——」という鼻を鳴らすような重いうなり声を聞き，同時に，ヒルベルトが，連れてきた2頭のイヌを呼びながら，息せき切って走ってきた。

「マナオだ！」

「やつらは獰猛だ！」

「危険だ！」

かれは続けてどなり，最後にわたしに「走れ！」といい残して去った。わたしはびっくりして，かれのあとを追った。

100メートルは走っただろう。かれは肩で息をしながら，「イヌに追わせたら，確実に殺されるか大けがをさせられてしまう。人間もへたをするとやられる。万が一危くなったら，手ごろな木にとびつけ」といった。そして，「マナオは実に獰猛で，イヌや人間を殺したあと，その肉を寄ってたかって食べてしまう」とつけ加えた。

ヒルベルトはこれだけ一気にしゃべって一息つき，近くの木からジャレと呼ぶツルを取って，それで2頭のイヌの首を縛り，わたしにイヌを絶対に放さないでくれと頼んで，マナオの大群のいるほうへもどっていった。

≪ペッカリーをしとめる≫

つなぎとめたイヌたちは，激しく鳴いて，あばれ狂った。すぐに，ズドーンと1発，続けてもう1発，鉄砲の音が響き，やがてかれはもどってきた。200頭をはるかに越える大きな集団だったという。かれはまだそれほど年をとっていない雌1頭をしとめていた。

シロクチペッカリーのことを現地の人たちはマナオ，あるいはプエルコ・デ・モンテ（野生のブタ）と呼んでいる。マナオはマナダ（動物の群れ）ということばに由来するのではないかと思われる。密林の林床にすむけものなかで，100頭を越える大きな群れをつくって生活しているけものはシロクチペッカリーだけである。

はじめて真近に見るマナオ，その丸々と太ったブタそっくりのからだつきからは，やつらの獰猛さはなかなか想像できなかった。からだの毛は黒くて荒く短く，下あごのまわりだけに白い毛が密にはえていた。

ヒルベルトはすぐに腹を裂きはじめた。そして腹の皮を少しめくって，

「こいつはやせている。全然脂肪がのっていない。自分は食べる気がしないがドクトールはどうする？」と聞いた。

「病気持ちか？」

「病気は持っていない」

「食べるとぐあいが悪いか？」

「味が悪いだけだ」

わたしはマナオの肉の味見がしたかったのと，せっかくしとめたのだ，この肉でも当分キャンプの食事は潤うだろう，と思ってヒルベルトに持って帰るよう命じた。かれは内臓を取り去り，頭を切り落として軽くし，長い棒に肢を縛りつけた。そこからキャンプまでは1時間余りかかる。ふたりでテンビンにしてかついで帰ったが，キャンプに着いたわたしはへとへとに疲れ切ってしまっていた。

≪極度の緊張≫

ベネージャ川の調査地域内で，マナオの大集団に3度めに出合ったのは12月21日だった。2回めと場所も時間もほとんど同じだった。先頭を歩いていたわたしは，吸いこんだ空気のなかからマナオの例の悪臭のわずかな漂いを識別した。

「ホボ，マナオが近くにいる」

「……」

そのとき，50メートルぐらい前方でカチカチカチッときばを打ち鳴らす音を聞いた。ホボはきょうはかれの愛犬，メロンを連れてきていた。メロンは街で育ったので，まだ野生の動物を追うすべをまったく知らなかった。かれはメロンの首をつかんで，「やつらは危険だ。引きさがろう」といった。

わたしはこのところ毎日，調査資料として，密林の歌，サルや鳥の鳴き声をテープに収録する仕事をサルの調査と並行して進めていた。そして，そのためには疾駆するマナオのドドドドドッというものすごい音と，カチカチときばを鳴らすかたい音とが密林の歌の伴奏としてぜひとも必要だと思っていた。

チャンスだ！

わたしはホボから銃を受け取り，弾を込め，安全弁をはずした。銃尻を右肩に押しあて右手で引き金のところをもって銃を固定した。また左手のてのひらにはひもを巻きつけてテープレコーダーを固定し，銃身の中ほどをもった。テープのスイッチを入れた。そして，マナオの大群のなかにおどり込んだ。先日，ヒルベルトは200頭を優に越えるといったが，それは決して誇張ではなかった。

きょうは森の下ばえはそれほどきつくなく，わたしは太い幹の陰に潜んでいるマナオや，それがとび出してくるさま，親子連れのマナオや母親が子どもの尻を頭で押すようにして逃げていくさまなどをつぶさに目撃することができた。〝伴奏〟はいちだんと近く，いちだんと激しくなっていった。まだ群れはどの方向へ逃げていくかを決めていない。わたしは右へ左へ，マナオの突進をかわしては，またかれらのいるなかへ走りこんだ。

テープレコーダーは快調にまわっていた。10分は優に経過したであろう。わたしの心に恐怖感が刻一刻とひろがっていっていた。群れはその先にある小川の低湿林のほうへ向かって流れはじめた。しかし，わたしはまだ完全にマナオにとり囲まれていて，次から次へと，猪突猛進が繰り返されていた。わたしはみずからの極度の緊張の維持に限界がきたことを感じた。

1頭のマナオの潜んでいる茂みにとび込んで引き金を引いた。やつの後頭部を確実に射ち抜いた。引き金を引くと同時に，万が一に備えて右へ横っとびにとんだ。やつは左へよろけて逃げた。子どもが1頭寄り添っていた。ひと呼吸おいて，もう一度わたしはおどしをかけ，やつが茂みからとび出してきたところを射った。どてっ腹に当たった。やつはもんどりうって下草をなぎ倒し，落ち葉のなかへ沈んだ。

そのとき3頭がわたしの背後を走り抜け，周囲からマナオのけはいは消えた。樹冠を2羽のヒイロコンゴウインコが「ギャアッ・——・——」としわがれた大きな声をあげながらとんでいった。ホボは50キロを越えるしとめたマナオを，服を血で染めながらまるごと背負い1時間歩いてキャンプへもどった。

≪ペッカリーのにおい≫

シロクチペッカリーに出合うといつも聞かれる，キバをカチカチ鳴らすかたい音は，群れへの警戒信号であり，同時に外敵に対する威嚇音でもあると思われる。またペッカリーは背中，尾のつけ根から20センチメートルぐらいの所にきついにおいを出す腺を持っていて，分泌液は興奮が高まったときに放出されるという。このにおい，いくら臭いといっても耐えられない臭さとは違うので，それで外敵の接近を防いでいるとは考えがたい。あるいは200頭を越えることもある大集団のまとまりの維持にひと役買っているのかもしれない。

ペッカリーのことを日本語でヘソイノシシと呼ぶことがあるが，この〝ヘソ〟は背中にあるにおいを出す腺に由来する。■



助手のホボはわたしのしとめたシロクチペッカリーをまるごと背負ってキャンプまで持って帰ってくれた

アオバズク　*Ninox scutulata*

アオバズクは，フクロウ科アオバズク属の一種で，全長約28センチ，フクロウ類としては中型の部類にはいる。背面はほとんど一様な黒褐色で，尾には灰褐色の横斑があり，腹部はクリーム色の地に暗褐色の不完全であらい縦斑がある。顔盤は発達しておらず，顔の部分と頭とが同じような色をしていて，その区別がはっきりしない。虹彩は黄色い。他のフクロウ類にくらべ，尾とあしが長く，あしゆびにはとげのようなかたい羽毛（うもう）がはえている。

この鳥は，インドからインドシナ半島，インドネシア，フィリピンにかけての南アジア一帯と中国，日本（北海道から沖縄まで），朝鮮，沿海州に分布する。一般には留鳥（りゅうちょう）だが，中国，日本，朝鮮，沿海州のものは渡りをする。

青葉のもえるころ

日本には5月はじめころまでに渡来し，低山帯の森林や人家近くの林，神社の境内などで繁殖する。渡来するとすぐ，あちこちの林から「ホーッ，ホーッ」というフクロウ類特有の鳴き声を聞かせてくれるが，これがちょうど青葉のもえるころにあたるため，アオバズクの名がついたともいわれる。鳴くのは夜半までと明けがたがもっとも盛んで，ふつうは7月ごろまで聞かれる。そのころ大都会のなかでフクロウの声を聞けば，まずこの鳥だと思ってまちがいない。繁殖を終えると，10月ごろまでには日本を去ってしまうようだが，完全にいなくなるのかどうかは，まだはっきりしない。

アオバズクは，フクロウ類のご多分にもれず夜行性で，昼間はめったに活動しない。せいぜい，大きな木の枝で休息しているのをたまたま見かけることがあるくらいのものだ。しかし，何かの拍子で追いだされると，昼間でもかなりの速度で枝にぶつかることもなく飛び去ってしまう。この鳥のつばさはかなり長く，このため，飛び方はフクロウというよりむしろタカに近く，ほとんど直線的に進んでいく。ただし夜，えさを捜しているときは，ときどきつばさを立てて，ヨタカのようなふわふわした飛び方をする。

繁殖は，日本では4，5月ごろ，つまり渡来した直後に始まる。巣はすみかにしている大木のほらを利用し，ふつう地上5～15メートルの高さのところにある。巣にはほとんど何も敷かず，3～5個の白色卵を産む。抱卵（ほうらん）は他のフクロウ類と同じく雌のみで



夜陰にまぎれ，ひなにえさを運ぶアオバズク。
フクロウ科アオバズク属。
ふだんはおとなしいこの鳥も
こんなときに近づくと，猛然と襲いかかってくる。
《窮鼠猫をかみ，窮鳥人を襲う》

撮影　水野仲彦





行ない，期間は約25日。雄はその間，テリトリー（なわ張り）の防衛や雌へのえさ運びに忙しいようだ。ふだんは静かに暮らしているこの鳥も，この時期だけは気がたっており，人が巣をのぞこうとしようものなら，猛然と目をねらって攻撃をしかけ，恐ろしいほどである。

故川口孫治郎氏の調査によると，ひなは巣で約28日間ぐらい両親から養育を受ける。最初のひなの孵化後19日めの観察では，4羽のひなに対し，午後7時40分に最初のえさを与えて以後20分の間に，両親合わせて18回もえさを運んできた。それ以後，徐々にえさを与える回数は減り，夜中はなく，午前4時半ごろ再び頻繁になり，午前5時で打ちきったという。これを見ても，夕方と明けがたに活動のピークがあることは明らかだろう。

アオバズクは昆虫（こんちゅう）類を主食としており，トンボ，セミ，タガメ，カミキリムシ，ハナムグリ，コガネムシなどなんでも食べる。ひなにもほとんど昆虫を与える。昆虫は飛んでいるのを捕えるらしい。そのほかにはネズミやジネズミ，小鳥，カエル，トカゲなどを食べることもある。

アオバズク属にはアオバズクを含めて18種があり，マダガスカルの1種を除けば，アジアとオーストラリア，ニュージーランドに分布する。

アオバズクは
日本には青葉の候にやってきて繁殖する。
枝に並んだこの親子，兄弟げんかでもしたのか
幼鳥の1羽は少し離れていじけているようす。
《兄弟は他人のはじまり》（上）

撮影　水野仲彦

シロフクロウ　*Nyctea scandiaca*

シロフクロウはフクロウ科シロフクロウ属を構成する唯一の鳥。その名のとおり全体に白色の美しいフクロウだ。全長約60センチとワシミミズクに次ぐ大きさをもち，つばさをひろげると1.5メートル以上になる。フクロウ科の鳥の通例で，雄よりも雌が大きく，雄の体重約2キロに対し，雌のほうは2.6キロに達する。フクロウ類としては珍しく雌雄の羽毛が異なっており，雄は肩や風切羽（かざきりばね）に淡褐色の斑点や横斑が多少あるほかは，全身ほとんど完全な純白である。これに対し，雌は，顔，のど，あしだけが純白

極北の大地にとけこむ純白の羽毛をもった
雄のシロフクロウ。フクロウ科シロフクロウ属。
レミングなどの野ネズミを主食とし
性質も荒々しい猛禽だ。
《白無垢鉄火》（右上）

PH. HOLMES-LEBEL



で，からだの他の部分は白色の地に褐色の斑や横縞がある。幼鳥は雌に似て，灰色の地に灰褐色の斑点があり，うぶ毛が多い。この鳥のあしはゆびまで羽毛でおおわれ，虹彩は黄色で，くちばしとつめは黒い。つばさは丸くて短い。

シロフクロウは北極圏のツンドラ地帯特有の鳥で，ユーラシア大陸にもアメリカ大陸にもいるが，ふつうは森林地帯へははいらず，ツンドラ地帯の小さな丘や氷床から突きでた岩，海岸の崖などをすみかとしている。この鳥がツンドラにしかすまないのは，そこにいるレミングという野ネズミをえさにしているためで，レミングのいない北極圏の島々，た



シロフクロウの母親は
地面に掘ったくぼみに生まれたひなを
北国の寒さから守るため
2か月近くも，からだで暖めてやる。
《スキンシップは育児の基本》（下）

PH. E. HOSKING



とえばフランツヨゼフランド，スピッツベルゲン，アイスランドなどにはシロフクロウはまったくいないか，いても非常に少ない。しかも，レミングは周期的に増減するため，シロフクロウもそれに応じてふえたり減ったりしている。

夏にはその分布域のうち北のほうにいることが多く，冬になると少し緯度の低いところに移動する。また，レミングの激減する何年かごとに，その通常の分布域を越えてもっと南へ大量にやってくることもある。たとえばシベリアのツンドラ地帯から南ロシアやモンゴルのステップに移り，一部は中国や日本にも姿を現わす。つまり，日本にはごくときたまやってくるわけだ。北アメリカではカナダの森林地帯まで移動し，あるものはアメリカ合衆国の中央部にも現われる。

極寒に舞う白い帝王

夏の夜の短い北極圏では，この鳥は昼間も夜と同じように活動している。いつもつがいか単独でいて，決して群れはつくらない。ツンドラ地帯の起伏のなかの小高い見張り場で自分のテリトリーをたえず見張っており，巣に近づくものがあると鋭い叫び声をあげ，タカのように急降下して襲いかかる。性質は獰猛で，猟犬などにも果敢に飛びかかるので，狩人でも近づきがたいという。また，見張りの合い間に，ときどきゆるやかにつばさを動かして飛び，らせん形の軌道を描きながら驚くほどの高さまでのぼっていく習性ももつ。ふだんは鳴かないが，繁殖期には飛びながら「キッ，キッ，キッ」という声をだす。

シロフクロウの主食はすでに述べたようにレミングである。成鳥となったシロフクロウは毎日３，４匹のレミングを食べるが，幼鳥でも１，２匹は必要だ。だから，２羽の成鳥と９羽の幼鳥からなる標準的な家族の場合，家族いっしょに生活する４か月の間に，わずか１～４平方キロのテリトリー内で1800～3000匹ものレミングを消化する計算になる。とはいえ，ある調査によれば，この数字は大量発生するレミングの数の20パーセントにしかあたらないという。だから，シロフクロウがレミングをとりつくすことはないし，逆にシロフクロウがいなければ，レミングはふえすぎてしまうだろう。シロフクロウは，レミングのほかに，シロテン，イタチ，ウサギ，鳥類（とくにライチョウやカモメのひな）も食べ，ときには魚もえさにする。また，ある地域では，レミングのかわりにハタネズミが主食となっている。

繁殖期は場所によって異なるが，だいたい４月中旬以降である。巣はツンドラ特有の小さな丘の頂につくり，土をごく浅く掘っただけの簡単なものだが，ときにはそのなかに少しばかりの乾草や何本かの羽毛を敷くこともある。雌は５，６月ごろ，白くて丸い卵を産む。１腹の卵数は４～９個，ときには11～14個で，フクロウ類としてはかなり多い。産卵はだいたい１日おきに行ない，雌は最初の卵を産むとすぐ熱心に抱卵を始める。このため，はじめに産み落とされた卵は，あとで産み落とされたものより早くかえる。また発育にも子どもたちのあいだで大きな差がある。

母鳥は，ひながかえったあとも，きびしい気候からひなを守るために，２か月近くの間巣のなかにいて，ひなを暖めてやらなくてはならない。一方雄は，雌が抱卵したり，ひなを暖めている間，せっせとレミングなどの野ネズミを雌に運んでくる。ところがおもしろいことに，雌はなかなかそれを受けとらず，雄はせっかくの捧げものをとってくれるように，また，えさをひなに分ける前に小さくちぎってやるように，雌に頼みこむような動作をするという。

また，雄は外敵から家族を守る役目も引きうけている。注意深くあたりを見張っていて，何か危険を見つけると，かなり遠くのことでも，鋭い叫び声を発して家族に知らせる。すると，雌は雄のところへ飛んできて，２羽で叫び声をあげながら巣の周囲を飛びまわる。それでも敵が近づくと，雄はなんのためらいもなく襲いかかり，ひっきりなしに攻撃を加え，相手が逃げだすまでやめようとしない。

極寒の地ツンドラにすむシロフクロウは
あしまでふかふかした羽毛におおわれている。
写真は雌で，雄のように純白ではなく
からだも雄よりひとまわり大きい。
《女上位騒ぐにあたらず》

PH. W. LUMMER

オナガフクロウ　*Surnia ulula*

オナガフクロウはフクロウ科オナガフクロウ属に属す唯一の鳥。全長35～40センチ，体重250～375グラムと比較的大きい。顔盤は白く，周囲を黒い羽毛で縁どられている。頭部は暗褐色で細かい白斑があり，背も黒褐色の地に不規則な白斑がある。腹部は白く，褐色の細かな横縞がはいっている。フクロウとしては頭が小さく，尾が長く，飛んでいる姿は一見タカに似たところがあるので，他のフクロウ類と見分けがつく。和名はむろん尾の長いところからきたものだ。

この鳥は，シロフクロウの分布域のすぐ南，つまりユーラシア，北アメリカ大陸の亜寒帯に分布し，その地域の開けた針葉樹林や混交林の林縁を絶好のすみかとしている。とくにシラカバと他との混交林に多いが，シラカバの純林にはいない。留鳥ではあるが，冬，雪が積もり，獲物が少なくなると，多少南のほうへ移動する。北国にすむ他のフクロウ類と同じく，オナガフクロウの分布域も，適当な隠れ家があるか否かという，すみ場所としての条件のほかに，レミングなどの野ネズミの分布状態に規定されているのだ。

レミングなどが正常に繁殖しているかぎり，この鳥はそのテリトリーを離れることはない。例外といえば，若鳥たちが，木を伐採された土地や灌木におおわれた未耕の地を求めて移動するぐらいのものである。しかし，北国ではネズミ類の密度は周期的に増減を繰り返しており，暖い冬のあとには平年よりふえるので，オナガフクロウは営巣（えいそう）したことのないところにさえ営巣する。逆にレミングなどが不足するようになると，この鳥は，冬のきびしさにではなく，飢えに迫られて，南への移動を開始する。こうなると，スカンジナビアやフィンランドの耕地に侵入していくし，デンマークやドイツの北部にも姿を現わす。さらに，たまにはハンガリーやオーストリア，シベリア南部，北部トルキスタンの山脈にまでいくこともある。

姿も習性もタカに似て

オナガフクロウは昼間に活動する傾向が強い。飛び方はフクロウというよりむしろタカに近い。短くて幅が広く，とがったつばさをもっており，羽毛も他のフクロウ類ほど柔らかくないので，飛ぶときにはタカのような羽音をたてる。習性もタカに似ており，日中，高い梢や電柱の上にとまって獲物が通るのを待ちうけている。とくに繁殖期には，この上で尾を振りながら「キッ，キッ，キッ」と鳴



オナガフクロウ。フクロウ科オナガフクロウ属。
その名のとおり尾が長く，性質も獰猛な
タカによく似たフクロウだが
写真は巣立ち直後の幼鳥だから，尾はまだ短い。
《若いヤツほど尻が軽い》

PH. B. MALLET-JACANA



くのでよく目だつ。この鳥はべつだん獰猛な性質ではないが，自分のテリトリーに人間などがはいってくると，怒りの叫びをあげながら木から木へと飛び移って攻めかかる。また森では，カケスからスズメまでどの鳥も昼間にフクロウ類を見つけるとからかいにくるものだが，相手がオナガフクロウだと，逆に返り討ちにあってしまう。

繁殖期は4月はじめごろからだが，ときには3月末に始まることもある。ふつうは木のほらや枯れ木のてっぺんの穴，人間がかけた巣箱などに営巣し，たまにはカラスやタカの古巣を利用することもある。巣のなかにはふつう何も敷かないが，自分の羽毛を敷いた巣が見つかったこともある。卵は丸くて白く，光沢がある。1腹の卵数はネズミの多い年と少ない年とで違い，ふつうは3，4個だが，ネズミの豊富な年には9～10個，ときには11～13個も産む。雄はふつう巣の近くで見張っていて，抱卵はあまりしない（逆にいえば，少しは手伝う）。そして人間や他の動物が巣に近づくとすぐ襲いかかるため，多くの観察者がこの鳥のすさまじい攻撃にあって，被害をこうむっている。

雌は最初の卵を産むとすぐ抱卵を始める。抱卵期間はまだはっきりしていない。ひなは産卵された卵の順序に孵化し，まっ白なうぶ毛に包まれている。巣のなかに3週間くらいいるが，きびしい寒さと食糧不足のため，死亡率はかなり高いようだ。とくに食糧の欠乏したときには，親鳥から見捨てられてしまうこともある。

オナガフクロウのえさはもちろんレミングなどの野ネズミが大部分を占めるが，リスやライチョウくらいの大きさまでの鳥類もかなり食べる。ひなには昆虫も与える。

ネズミをとらえたスズメフクロウ。
フクロウ科スズメフクロウ属。
からだは小さいが，れっきとした猛禽。
自分と同じくらいの鳥や哺乳類も食べる。
《チビの大食い》
PH. J. LINDBLAD-PHOTO RESEARCHERS

巣立ち直後のスズメフクロウの幼鳥。
キツツキの捨てた穴を巣にすることが多いが
雌は前もってそれをきれいに掃除してから
卵を産み，ひなを育てる。
《健全なる身体は健全なる住居に宿る》（右上）
PH. J. LINDBLAD

スズメフクロウ

Glaucidium passerinum

スズメフクロウはフクロウ類のうちもっとも小さいもののひとつ。スズメフクロウ属に分類され，全長15～17センチ，体重65～77グラムで，ムクドリよりまだ少し小さい。背中は灰褐色で，クリーム色の小さな斑点がある。腹側は灰白色の地にあらい暗色の縦斑をもつ。顔の部分は全体に白っぽいが，顔盤はあまり発達していない。

この鳥もオナガフクロウと同じく亜寒帯にすむ留鳥で，ノルウェーから東部シベリア，さらに沿海州，サハリンにいたるユーラシア大陸北方に分布している。しかし，オナガフクロウと違って，ヨーロッパでの繁殖地は中部ヨーロッパやアルプスにまでひろがっているし，アメリカ大陸にはいない（ただし，北アメリカの西海岸には別種のスズメフクロウがすんでいる）。

森林性の鳥で，とくにシラカバやポプラの混じった明るい針葉樹林をすみ場所にしていることが多い。しかし，あまり深い森林は好まないようだ。また，冬には村落の近くに現われることも多い。

この鳥は昼間もかなり活動するらしく，スウェーデンの森林では日中に飛びあるいている姿をしばしば見かける。しかし，木の枝やキツツキの穴などに隠れていることも多い。春の繁殖期になると，この鳥は日没の少し前から叫び声をあげはじめ，夜明けとともに鳴きやむ。この鳴き声をまねてやるとすぐに近寄ってくるが，音もなく林をぬいながら黙ってあとをつけてくるので，どこにいるのか，なかなか見つけにくい。

スズメフクロウは，からだは小さいが，なかなかどうしてりっぱな猛禽類である。隠れ家付近に落ちているペリットを調べると，その食糧のほとんどは野ネズミとかジネズミといった小型の哺乳（ほにゅう）動物とシジュウカラのような小鳥で，しかも，それらをほぼ半々の分量で食べていることがわかる。獲物の大部分はスズメフクロウ自身の体重の3分の1以下だが，ときにはアカゲラやシメのように自分と同じくらいの重さの鳥を襲うこともある。この場合には，一般に飛んでいるところを捕えるようだ。また，スズメを追って人家の近辺にまで姿を現わすことも多い。ほかには昆虫類を食べ，例外的にはトカゲを捕えることもある。

獲物をつかまえると，その場で食べてしまうこともあるが，たいていはどこかの穴に運





スズメフクロウは，森の奥の小さな隠者。
世を捨て，ひっそりと孤独の生活を送っている。
とった獲物は，あとで食べられるよう
隠れ家にしまっておくことも多い。
《すねてはみても腹は減る》（下）

PH. BILLE



んでいく。これは，いつでも食べたいときに食べるためと，食糧不足に備えるためだろう。

家とえさつきのプロポーズ

スズメフクロウの巣は，キツツキが針葉樹の幹にあけた穴につくられることが多い。これが見つからない場合には，自然にできた樹洞を利用するが，いずれにしても，巣として使う前に，非常にていねいに掃除をする。雄は，自分のテリトリー内で見つけたいくつかの巣穴のひとつを雌に見せようとして鳴く。雌が，それが気に入ったそぶりを示すと，雄はこの穴にえさを置き，雌がこの捧げものを食べにくるまで，巣穴の入り口で「フゥ，ノゥ，フゥ」と低い声でさえずりながら待ち受けている。

こうしてつがいができると，4，5月ごろに産卵が行なわれる。卵の色はまっ白い。1腹の卵数は4～6個で，2日ごとに産み落とされる。抱卵は約1か月も続き，孵化したひなは，さらに1か月も巣にとどまっている。

スズメフクロウ属には，スズメフクロウのほかに13種が含まれる。



アフリカスズメフクロウ *Glaucidium perlatum*。
フクロウ科スズメフクロウ属13種のうちのひとつ。
アフリカ大陸に広く分布し
開けた場所や林縁
アカシアのはえたところを好む。
PH. P. JOHNSON-N. H. P. A

明るい針葉樹林を好むスズメフクロウには珍しく
昼なお暗いスカンジナビアの森で
何ごとか沈思黙考しているような姿だが
ただ，夜を待って休んでいるだけだろう。
《へたな考え休むに似たり》（94—10，11）
PH. BILLE



シロフクロウの繁殖率は，その食糧となるレミングの数によってかなり左右される。レミングは３，４年の不規則な間隔で数がふえたり減ったりするものだが，レミングの豊富な年には食糧がたくさんあるわけで，卵の数もふつうの年の２倍くらいになる。逆にレミングの数が少なくなると，育てるひなの数を減らしてしまう。写真は雌のシロフクロウ。

PH. J. MARKHAM









コキンメフクロウ

Athene noctua

コキンメフクロウは，平たくてくっきりとした顔の印象的な鳥で，フクロウ科コキンメフクロウ属に属している。全長22～25センチ，体重約160グラムと小柄で，ずんぐりしたからだつきをしている。背中は灰褐色で，白い縞と斑点をもつ。腹部は白色の地に褐色の縦縞がある。虹彩は黄色い。

ユーラシア大陸の温帯にすみ，その分布域はヨーロッパからヒマラヤ，モンゴル，沿海州に及んでいる。また，北アフリカやアラビア半島にもすんでいる。ヨーロッパでは，イギリスの北半分とスカンジナビア，アイスランドを除くほぼ全域に生息しているが，とくに地中海に面した地方に多い。他のフクロウ類と異なって，森林のなかはあまり好まず，畑地や木のまばらにはえた平野，海岸などにすんでいる。ふだんは農家の屋根裏や古い建物の壁の割れめ，村はずれの木のほら，岩の裂けめなどに隠れているが，人家近くにいるせいか，人間をあまり恐れない。

この鳥は留鳥（りゅうちょう）で定住性が強く，たとえどんなにきびしい冬でも決して自分のテリトリー（なわ張り）を離れようとはしない。このため，何年ごとかに周期的に訪れる厳冬には，飢えと寒さでこの鳥の数が激減することがある。すると，もとの状態にもどるのにその後数年もかかる。

昼間もかなり活動するらしく，真昼でもよく姿を見せ，枝先や電柱，垣根などにとまっている。しかし，たいていは自分の周囲のことには関心を示さず，何か考えごとでもしているかのようにじっとしているだけで，あまり動きまわらない。もっとも活動的なのは，やはり夜明けか日暮れどきだ。

えさはすべて動物だが，昆虫（こんちゅう）類がその約半分を占める。またミミズやカタ



コキンメフクロウ。
フクロウ科コキンメフクロウ属。
驚かしたり，からかったりすると
何度もおじぎを繰り返す奇妙な習性をもつ。
《適度の運動は緊張を和らげる》（左）
PH. OKAPIA

一点を見すえる澄んだ目，くっきりした顔だち
コキンメフクロウは，ギリシャのむかし
科学と知の神パラス・アテナの表徴にもされたが
後には，不吉な鳥としてきらわれるようになった。
《人の心と秋の空，あるいは諸行無常》（上）
PH. BAVARIA-SCHUNEMANN

コキンメフクロウの分布。
ヨーロッパからヒマラヤ，沿海州にかけての
ユーラシア大陸の温帯と
北アフリカ，アラビア半島にすむ。
森林のなかは好まず，畑地や平野，海岸に多い。





ツムリも食べる。脊椎（せきつい）動物のうちではネズミ類が筆頭で，その大部分は野ネズミである。このほか，適当にイタチ，コウモリ，モグラ，ジネズミ，子ウサギ，小鳥とそのひな，カエル，トカゲなどを食べている。小鳥のひなは巣からさらってくるが，親鳥は飛んでいるのを捕える。しかし，鳥はコキンメフクロウの食物のごく一部にすぎない。

この鳥は，つかまえることのできそうな獲物を見つけると，つばさをぴたりとからだにつけて獲物に襲いかかり，両あしでつかんで止まり木にもどってくる。そこで獲物をつめで握ったまましばらくじっとしていて，それからおもむろにくちばしで２，３回つついて殺す。鳥をつかまえた場合は，食べる前に羽毛（うもう）をむしり取ってしまう。また，哺乳（ほにゅう）類だと，毛皮を裏返しにして，じょうずにはぎ取ってしまう。

亭主は気まぐれで子ぼんのう

繁殖期は３月から６月の間だ。この時期にはよく「キイッー，キイッー」あるいは「クゥッー，クゥッー」という声を出すし，くちばしをカチカチ鳴らしたりもする。ほかのフクロウ類と同じく，特別の巣はつくらず，いつもよくいく何か所かの隠れ家のひとつを利用する。つまり，木のほらやキツツキの古巣，岩や壁の裂けめ，ウサギの穴，廃屋の片すみなどがそれだ。ここに雌はふつう３～５個の



――うちの宿六，どこをうろついてんだろう？
コキンメフクロウの雄は気まぐれで
抱卵中の雌にも規則的にはえさを運んでくれない。
でも，子どもが生まれると食料調達に精を出す。
《子を持って身持ち治まる》（上）
PH. OKAPIA

くるりとふり向いたコキンメフクロウ。
この鳥にかぎらず，フクロウ類は
頭を180度も回し，まなざしをまっすぐ向けて
真後ろを見すえることができる。
《借金は視野を狭くする》（下）
PH. M. C. NOAILLES-JACANA

このコキンメフクロウにかぎらず，フクロウ類は
群れをきらい，たとえわが子といえども
えさをとれるようになれば，追いだしてしまう。
ただし，放浪癖はまったくない。
《孤独はさすらい人だけのものならず》（右上）
PH. M. BROSSELIN-JACANA



白い卵を産む。これは4月末から5月はじめのことが多く，それから約28日間，雌だけが抱卵（ほうらん）する。その間，雄は雌を養うわけだが，雄は規則的にえさをもってはこないので，雌も朝と夕方，えさを捜すために巣を離れなくてはならない。しかし，ひなが生まれると，雄は一生懸命えさを運ぶ。ひなは，4週間ぐらい巣のなかにいる。

ところで，ギリシャのむかし，この鳥は人人から非常に尊重されていた。ギリシャ人のあいだには，人の名誉をたたえるとき，そのしるしにこの鳥を与える風習があったし，さらに，この鳥の目が明るく澄んでいることや態度の重々しいことから，この鳥を科学と知恵の神パラス・アテナの表徴にもしていた。ところが後世になると，夜鳴くことや小鳥を殺すことから不吉な害鳥だとされるようになった。だが実際には，この鳥の与える害は，ネズミ退治などでの貢献にくらべれば，まったくとるにたらないものだろう。大型の猛禽類のほとんどいなくなった現在，西ヨーロッパにおいてはこの鳥の天敵はほとんどいない。しかし，道路交通の発達とともに自動車の犠牲になるものが続出している。これは，この鳥が光のあるところに昆虫が集まってくることを知っているため，自動車のヘッドライトに吸いよせられるからだ。そして，それはほんの氷山の一角にすぎない。あらゆる面での開発の嵐を前に，この鳥もまた……。



木のほらに隠れ
顔だけのぞかせたコキンメフクロウ。
目をつむってさえいれば，木の色にまぎれて
ちょっと見分けがつかないのだが……。
《一行失あれば百行ともに傾く》（下）

PH. A. BERT-JACANA

コキンメフクロウの晩餐





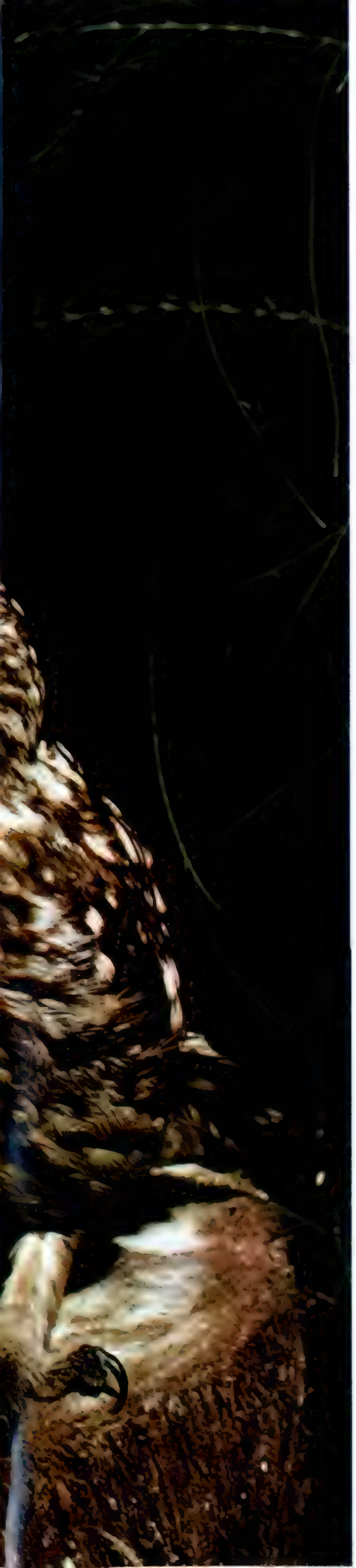
コキンメフクロウの鋭いまなざしが
暗闇をとおしてネズミの姿をとらえた。
背後から音もなく襲いかかるフクロウ。
せめて，ネズミがその姿に気づいたなら
フクロウにはかなわぬまでも，おどしをかけ
相手が一瞬ひるんだすきに
逃げおおせることもできたかもしれない。
だが，突然，背中に刺すような痛みを感じたとき
すでに手遅れだった。
とぎすまされたつめがからだに食いこみ
ネズミの目は苦悶と悲しみにうるんでいく。（上）

フクロウは
なおも抵抗するネズミを捕えて離さず
鋭いくちばしでとどめの一撃を加えた。
断末魔の苦しみにあえぎのたうつネズミを
頭から飲みこんだフクロウの目は
勝利の喜びに，みるみる細められていく。（中）

生のなごりをとどめた柔らかい肉が
戦いにささくれかわいたフクロウののどを
やさしく押しひろげ
なま暖かさが，からだじゅうに浸みわたる。
おお，この恍惚。
生きる喜びの凝縮した，この一瞬。（右上）

戦いと狂喜の晩餐は，終りを迎えた。
恍惚からさめ，薄目を開くと
残ったのはネズミのしっぽだけ。
突如として暗転する舞台。
《宴のあとに残るむなしさ》（右下）

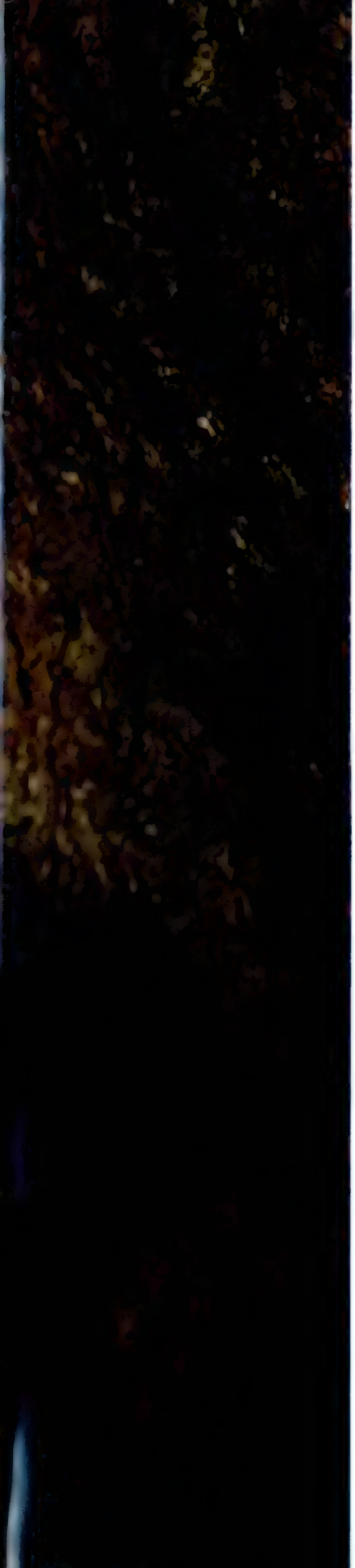
PH. J. L. S. DUBOIS











アナフクロウ

Speotyto cunicularia

アナフクロウはフクロウ科アナフクロウ属を構成する唯一の鳥。その名のとおり、地面にあけられた穴をすみかとする変わった習性をもっている。全長は約22センチ、地上生活と結びついた長いあしと、フクロウ類としては比較的小さな頭によって見分けることができる。虹彩は黄色い。

この鳥はカナダ西南部からティエラ・デル・フェゴにいたるアメリカ大陸のほぼ全域に分布する。北方で繁殖するものは冬になると南へ移っていくが、アメリカ合衆国南部以南に生息しているものは留鳥となっている。アメリカ大陸の西海岸に多く、広大な草原や半砂漠にすんでいて、木のはえたところにはいない。

まったくの地上性で、これらの広大な地のところどころにあけられた穴に小さなコロニー（集団営巣地）をつくって暮らしている。この穴は、プレーリードッグやウッドチャックといったリスの仲間、ビスカーチャ（チンチラ科）、キツネ、スカンク、アルマジロなどが捨てていった巣穴を利用する。そして、これらの動物が近くにいても、アナフクロウはいっこうに困ったようすも見せず、すこぶる賢明にこれらの動物と共存しながら、コロニーを維持している。これは鳥の世界では非常に珍しいことで、この鳥のほかには例を見ない。

招かれざる客ガラガラヘビ

ところで、この鳥の隠れ家にもうひとつ別の動物が、いっしょにすもうとしてやってくることがある。ガラガラヘビである。この猛毒をもった恐ろしいヘビは、アナフクロウのすんでいる地方にはたくさんいるのだ。両者は、ときにはたがいにそしらぬ顔をして平和にやっていくこともある。しかし、たいていの場合、ヘビがアナフクロウを追いだし、その場所をひとり占めにしてしまう。

アナフクロウはかなり昼行性の鳥で、日中でも、少なくともコロニーのうちのだれかが、地下の隠れ家の入り口の掘りおこした盛り土の上にとまって見張っている。人間を見ると穴のなかに姿を隠したり、地面すれすれに飛んでいって隠れてしまうが、その前に、まるであいさつでもするかのようにうなずいてみせるおもしろい習性がある。また、自分のテリトリーのなかに敵が侵入してくると、相手を脅かすようにその相手の周囲をぐるぐる飛びまわる。飛び方は速いが、長く飛ぶことはない。地上では、長いあしを使ってとても速



闇をつき，音もなくコキンメフクロウが舞う
昼間は，木の枝などにとまっていても
ただぼんやり過ごしているだけだが
夜の行動には生活のすべてがかかっているのだ
《夜遊びは身を助ける》（左）
PH. E. HOSKING

コロニーの入り口で見張りをするアナフクロウ
フクロウ科アナフクロウ属
敵が近づくと，ちょこんとあいさつしたあと
穴に隠れるか，叫びながら飛び去っていく
《憎きなかにも礼儀あり》（上）
PH. E. P. S



く動きまわる。

狩りは、ふつう早朝と夕暮れに行なわれる。えさは昆虫類、とくにバッタ類やサソリが中心だが、小さなヘビや小鳥も食べる。ヘビに襲いかかるときは、つばさを楯のようにして身を守りながら、くちばしでつついて殺す。このほか、小型のネズミ類や鳥のひな、カエル、トカゲなどを食べることもある。小さい獲物だとその場で食べてしまうが、大きい場合には、小刻みに飛びながら自分の隠れ家まで運んでいく。獲物はこの途中で殺されてしまう。

この鳥は、日暮れとともにまるでフルートでも吹くような声で叫びはじめる。そして、夜のとばりがおりるころ、コロニーにすむどの鳥も次々と飛びはじめる。

繁殖は3月ごろ始まる。産卵期は地方によってまちまちだが、アメリカ合衆国の西部では4，5月ごろ。巣は自分の隠れ家をそのまま利用するが、必要があれば、あしとくちばしで3メートルもある水平なトンネルを掘って巣穴を大きくする。雌は、この巣穴の奥の産室に5，6個の卵を産む。卵の色は白く、ほとんど丸い形をしている。なお、卵は産室の土の上に直接産み落とすこともあるが、ふつうは少量のかわいた草や獣毛，羽毛などが敷いてあることが多い。この巣は、続けて何年間も使われるため、毎回手入れはするものの、決して清潔ではなく、腐敗した食べ残しのえさやふんが、吐き気をもよおすような悪臭を放っている。

巣穴を横目に，長いあしでたたずみ
何やらうらめしげな表情のアナフクロウ。
見張り番にもいいかげんあきたのか。
それとも腹が減ったのか？
《大地に生きるのは楽じゃない》
PH. F. ERIZE-PHOTO RESEARCHERS

モリフクロウのえさと繁殖

——サザンの研究から

斎藤隆史

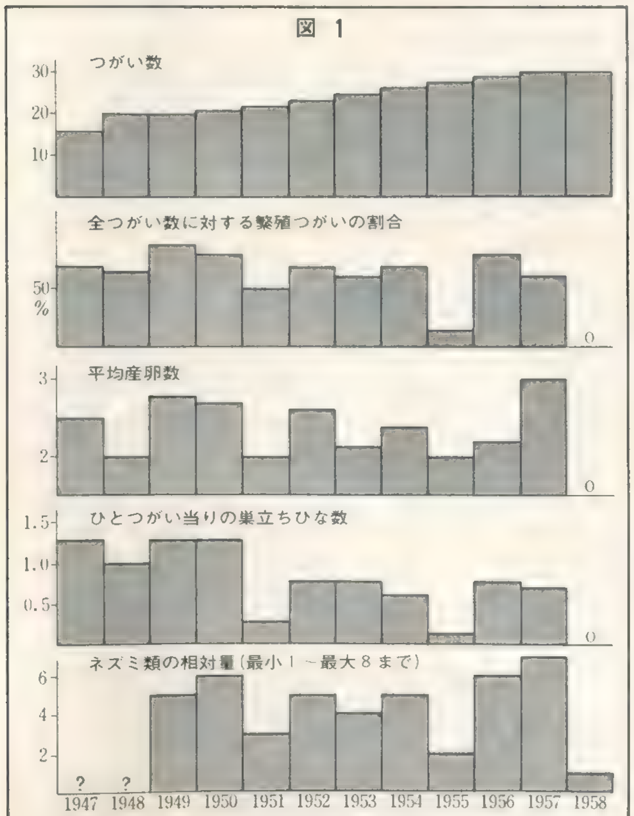
鳥の繁殖は，えさとなる動物の多少によってどのような影響を受けるのであろうか。いったい自然状態ではどうなっているのだろう。この単純な疑問に答えることは，しかし，たいへんむずかしいことである。それはこれまで，鳥の生態について数多くの研究が発表されてきたにもかかわらず，このような問題を扱った研究がわずかしかないことからも，およその見当がつく。ここで紹介するサザン（H. N. Southern）のモリフクロウの研究は長期間継続して多数の個体を対象とした点では，貴重な例なのである。

ところで，このような問題を研究する場合，えさの種類が少なく，しかもえさの同定やその密度の推定が比較的容易であるような鳥を対象とするのが，もっとも望ましい。この点では，昆虫（こんちゅう）食の小鳥類よりもワシタカ類やフクロウ類などの大型の猛禽類が適している。しかし一方において，これら大型鳥は行動範囲が広く，したがって密度が低いので，多数の個体を扱おうとすると非常に大きな困難にぶつかることになる。

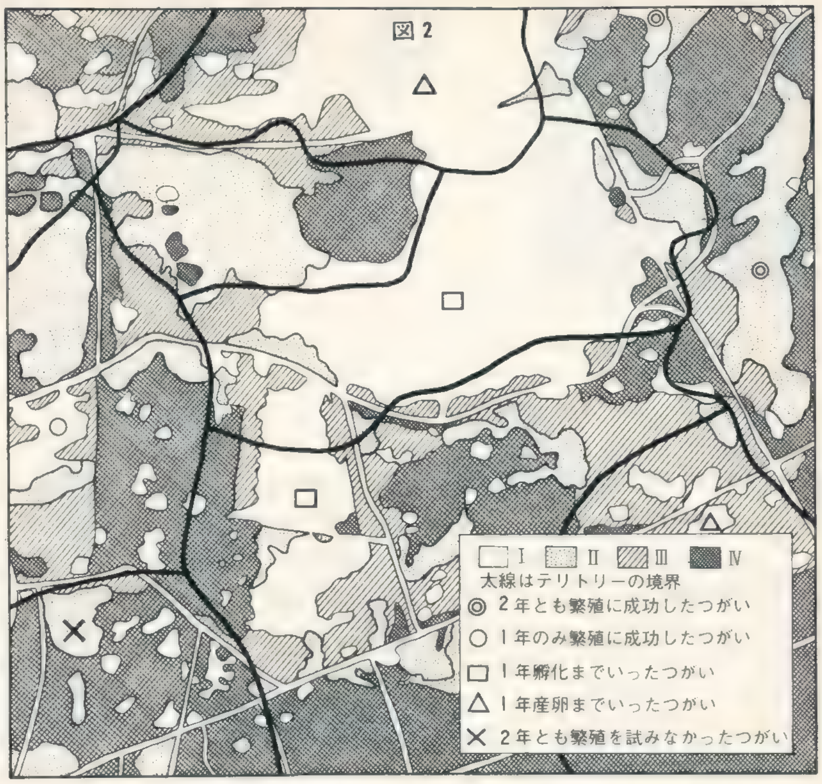
さて，モリフクロウはこの研究に最適な鳥であった。この種は全長約38センチの中型のフクロウで，ヨーロッパから北アフリカに広く分布し，森林，農園，庭園などにふつうに見られる鳥である。サザンは12年間にわたり，イギリスのワイタム地域の森林で研究を行なった。この森林はカシワ類を主とした落葉樹林で，モリフクロウにとっては好適なすみ場所であるばかりでなく，他の大型の鳥にくらべるとかなり高密度（10ヘクタール当りほぼひとつがい）で生息している。しかも，フクロウ全般に見られるように，えさをまるごと飲みこんでしまい，あとになって不消化な骨や毛をペリットとして吐きだす性質があるため，多数のペリットを拾い集めて，残された骨を調べれば，えさの種類や数が容易にわかる。

その結果，モリフクロウのえさはアカネズミの一種〔*Apodemus sylvaticus*〕とヤチネズミの一種〔*Clethrionomys glareolus*〕の2種がほぼ同じ割合で全体の70パーセントを占めていた（以下の文では簡略のため，前者を単にアカネズミ，後者をヤチネズミと呼ぶことにする）。そして，ハタネズミの一種とヨーロッパトガリネズミがそれぞれ13パーセントと12パーセント，ヨーロッパモグラが4パーセントであった。このほかに，ネズミ類が少ない年には小鳥類や甲虫類，ミミズ類もとるが，これらはえさとしては重要ではない。このように，モリフクロウはほとんど5種のえさに限られ，しかも基本的には，アカネズミとヤチネズミの2種だけに依存しているといって差しつかえない。

そこで，この2種を中心に，調査地域に定期的に一定間隔で多数のわなをかけてえさの密度を調べ，同時に捕えたネズミ類に金属製の脚環をつけて放し，どれだけのものがモリフクロウに捕獲されるのかをペリット内の脚環から調べた。



研究をすすめるうえで，モリフクロウが持つ唯一の欠点は，夜行性であることだったが，調査法をくふうすることによってこれは解決できた。サザンは詳しい研究地域の地図をつくり，その地図上に，雄が狩りをする前にたがいに鳴きかわす声をもとにしてその位置を書き入れ，また2羽の雄がテリトリー（なわ張り）争いをした位置，ねぐらに用いる木の位置，営巣（えいそう）位置などを記入，さらにねぐらから鳥を追いだすとテリトリーの境界まで飛んでいって引き返す性質を利用して，その地点を記入するなどによって，テリトリーの配置と個体数を確かめたのである。



また，かれらが樹洞に営巣する性質を利用し，巣箱を架設し，営巣しているかどうか，さらに繁殖の進行状況を直接木に登らずに地上から確かめられるように入り口に鏡をとりつけ，側面に金網をはって，赤色光（フクロウ類は赤色光の照射によって行動を阻害されない）を照射し，ひなに与えるえさやその行動などを調べた。そして，巣箱で育ったすべてのひなには脚環をつけた。

えさの多さと繁殖結果

テリトリーの調査から，モリフクロウは強い留鳥性（りゅうちょうせい）であることがわかった。テリトリーの広さは4～13ヘクタール，平均9ヘクタールで，一度テリトリーをもつと，年によってその境界がわずかに変化することはあっても，6～10年間もほぼ同じテリトリーを持ちつづけた。

さて，モリフクロウは年1回だけ繁殖し，3月中旬ごろに2～4卵を産み，5月中旬ごろにひなが巣立ちする。巣立ったひなは約3か月間も親の給餌やその他の世話を受け，独立するとほぼ数キロの範囲に分散する。

ところで，この研究地域ではすべてのつがいが毎年繁殖するわけではない（図1）。図からわかるように，ネズミ類の多さに関連して，繁殖するつがいの割合が変化する。そこでえさの相対量が1～4までの年と，それ以上の年とに分けて比較すると，前者が31パーセント，後者が75パーセントと，えさの多い年に繁殖するつがいの割合はずっと高くなる。

とくにこの10年間のうちでもっともえさの少なかった1958年には，30つがいも生息していながら，すべてのつがいが，まったく繁殖を試みようともしなかったのである。同じようにして，えさの多い年と少ない年で平均産卵数をくらべると，前者が約3卵，後者が2卵で1卵の差があり，えさの多さが中間の年には産卵数も中間の値をとった。

しかし，産卵したつがいがすべてうまくひなを巣立ちさせるのではない。第一に卵の孵化率は23～60パーセント，平均約50パーセントと非常に悪い。この低率は受精率が悪いためではなく，孵化しなかった卵のほとんどすべてが，発生途中に胎児が死んだのである。モリフクロウの場合雄が抱卵（ほうらん）中の雌にえさを運んで与えるのだが，えさが少ないと雄が雌にじゅうぶんなえさを与えられず，雌は自分自身で狩りに出なければならなくなる。その結果，雌が長時間巣外に出ていたために卵が冷えて胎児が死んでしまうか，そのまま雌が巣を放棄してしまうことが，孵化率の悪さのおもな原因であった。

さらに孵化の段階でも，多くの猛禽類に見られるように，すべての卵が同時に孵化しないという問題がある。そのために，孵化したひなのあいだには大きさに違いが生じ，とくにえさの少ない年には遅れてかえった小さなひなが餓死にしてしまうことになる。また，この種は一度繁殖に失敗すると，やり直しをしないのがふつうであるが，えさの多い年には再営巣するつがいの割合が高くなる。

以上のようないくつかのことが関連して，個体群全体としてみると，えさの多

——→ *

渡りの不思議 5

渡り鳥とひとくちにいっても……

吉井　正

「オオミズナギドリは渡りをするのか？渡り鳥なのか，どうか？」といった質問を，しばしばジャーナリズム関係から聞かれることがある。ところが，むかしから〝渡り〟あるいは〝渡り鳥〟に対して〝おおらかな〟定義がまかり通っているので，上記の質問などにお答えするとき，いつも苦労する。

〝渡り〟とはなんだろう

〝鳥の渡り〟を簡単明瞭に定義してみると，「鳥が夏の生息場所と冬の生息場所の間を定期的に移動すること」ということができる。ところがこの意味では，いわゆる渡り鳥も，そうでない鳥も，ほとんどすべての鳥が，大なり小なりの渡りをする。日本各地で1年じゅう見られるスズメ，ムクドリのような鳥も，よく調べてみると距離はそんなに遠くはないが，夏の繁殖場所と冬の生息場所とが，離れており，かれらはその間を定期的に移動する。こうなるとスズメもムクドリも渡り鳥だ，ということになる。

しかし「渡り鳥いつ帰る」「鳥の渡るころ」などと季節の情感をこめたことばのなかの渡り鳥が，スズメ，ムクドリをも意味するとなると，味もそっけもなく，きわめてぐあい悪い。鳥類研究上からいっても，これではなにかと不便である。

そこで一般に〝渡り〟または〝渡り鳥〟を，「遠く離れた夏の繁殖場所と冬の生息場所とのあいだを定期的に移動すること，あるいは移動する鳥」の意味に用いることが多い。しかし，ある場所で決まった時期に顕著な移動が見られると，その移動をも〝渡り〟という場合も多く，こうした場合の〝渡り〟と前述の〝渡り〟とが混同されて，誤解を生ずることがしばしばある。

たとえば，新潟県柏崎市では，毎年10月に50羽，100羽あるいは数百羽のヒヨドリの大群が，陸続として海岸沿いに通過し，米山方面に向かって移動していくのが見られる。千葉市郊外では秋にカケスの群れが西に移動するのが見られる。これらを目撃して，「ヒヨドリが渡る」「カケスが渡る」と多くの人が記録にとどめるのは当然といえる。しかし，この〝渡り〟をガン，ハクチョウ類の〝渡り〟と同列に扱うのはまちがいであり，混乱のもととなる。

またマガモ，コガモ，ヨシガモなどのカモ類を単純に〝渡り鳥〟〝冬鳥〟としてかたづけることがしばしばあるが，これらの鳥は春夏に本州中部以北，北海道でもかなり繁殖するので，それらの地域の人にとって，カモ類が〝渡り鳥〟や〝冬鳥〟でない場合が多い。したがって，ある種の鳥が渡るとか，渡り鳥であるとかいう場合，その鳥の移動の経験や状態をよく把握したうえで表現しないと，学術的にはもちろん，常識的にもまちがいや混乱を招く。

このように，わたしたち日本人の常識には〝鳥の渡り〟に対して，長距離のものと，長距離かどうか不明のものと，2本立ての定義が厳然と存在するので，〝渡り〟を語るときこの点を絶対に忘れてはならない。

渡りの調査および研究

渡りの経路に当たる地域では，毎年決まった時期に大群の鳥の通過や，個体数が急激に増減する現象が見られる。こうした鳥の渡りの現象は太古の時代から現代にいたるまで，人間にとってたいへん興味深いなぞであった。

したがって，このなぞ解きに挑戦したものは，古代ギリシャの大学者アリストテレスをはじめとして数限りなく，「ツル，ペリカン，ガンなどは冬期暖地に渡るが，ツバメは渡りをせず，木のうろや湿地の泥中で冬眠する」などというかれの学説やそのほか，「渡り」に関する古今東西の研究は無数にある。

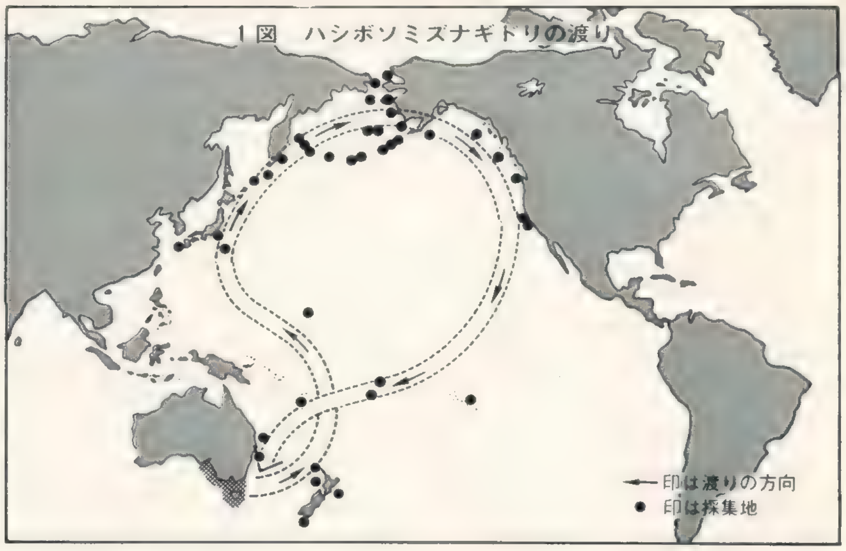
しかし，現在も多くの研究者が分布，行動，生理，系統分類，進化，遺伝など各方面から研究のメスを入れ，渡りのなぞ解明に努力しつつある。これらの調査研究は現在どのような方法で行なうのか。おもなものを次にあげてみよう。

1　ある鳥類（または亜種）に関する分布や諸地域における，個体数の季節変化に関するデータの蓄積（観察や採集記録の収集，整理，分析）。

2　渡りコース地点などでの視認観察。

3　夜間移動の調査（燈台斃死鳥や上空

1図　ハシボソミズナギドリの渡り



カラーページ解説

＊ ──────→

い年にはひとつがい当りの巣立ちさせたひなの数は約1羽，少ない年には0.3羽と3倍もの差が生じてくる。

主要なえさの多少は，まず繁殖するつがいの割合，産卵数，孵化率，巣立ち率に次々と重要な影響を及ぼしていることが，以上のように明らかにされた。逆にいえば，モリフクロウの繁殖の状態から，ネズミ類の相対的な多さを知ることができるほど，両者の関係は密である。

テリトリーと繁殖

これまでにえさの量と繁殖について述べてきたが，えさの少ない年でも繁殖するつがいがいて，うまく巣立ちひなを育てている。これは全体としてのえさの量以外にも繁殖に関係する他の要素があるに違いないことを示している。モリフクロウはふつう，テリトリー内の地上2メートルぐらいの枝にとまっていて，聴覚によってえさの位置を知り，飛びかかって捕える。だから，ネズミ類にとって好適なすみ場所や，かれらを捕えやすい場所を多く含んだテリトリーをもつつがいは，ある年に全体としてえさが少なくとも，そうでないテリトリーをもつつがいにくらべれば，より多くのえさをとることができるだろう。

そこで，サザンは，つがいのもつテリトリー内の植生――とくにネズミ類が活動する地上近くの植生が，そのつがいの繁殖に影響しているのであろうと考え，研究地域の一部を選び，下ばえの状況を詳しく調べて，それを次の4つの型に分けた。

Ⅰ　樹冠が密で，地上がほとんど裸地である地域。

Ⅱ　樹冠が密で，下ばえがまばらにはえた地域。

Ⅲ　樹冠部はⅡよりも粗であり，下ばえは丈高く，より密にはえている地域。

Ⅳ　樹木がまばらにはえ，樹木の下以外は下ばえが丈高く，かつ非常に密生している地域。

そして，2年間，おのおのの型の植生ごとにわなをかけて，ネズミ類の分布を調べ，金属性の脚環をつけて放し，ペリットを集めて回収した脚環から各型でどのようにフクロウが狩りをしているかを分析した。

その結果，各型内のネズミ類の分布と密度は，アカネズミが各型内にほぼ均一に分布しているのに対して，ヤチネズミでは下ばえが密になるにつれて個体数が増加する。Ⅰではほぼ同数，ⅡとⅢでは2倍，Ⅳでは約3倍も多く捕獲された。平均すると約2倍になっている。

一方，モリフクロウに捕獲された数はどうだったろう。2種の分布とその密度から考えれば，モリフクロウは各型でほぼ同じ割合でアカネズミに出合うだろうし，ヤチネズミには下ばえが密になるにつれて多くの個体に出合うことになるだろう。ところが実際は，ヤチネズミの場合には期待どおりだったが，アカネズミでは裸地（Ⅰ）でもっとも多く捕獲され，下ばえが密になるにつれて捕獲数が減少した。しかも，わなで捕獲した数はヤチネズミがアカネズミの約2倍であったにもかかわらず，実際にフクロウが捕獲した割合はヤチネズミ9に対してアカネズミ7であり，アカネズミの半数はⅠで捕獲されている。

このことから，フクロウが狩りをする場合，そのテリトリー内にⅠの地域を多く含んでいることが好つごうであることが推測される。ところが，実際にテリトリー内の各型の植生の分布とネズミ類の密度，繁殖結果を調べてみると，裸地が

通過の鳥の鳴き声の調査)。

4　レーダー研究(昼夜間の移動調査)。

5　標識調査(番号刻印の金属脚環を付し放鳥，放鳥および回収データの蓄積と分析)。

6　特定条件下の渡り鳥に関する実験や研究（太陽位置を誤認させるような特殊装置の密室やプラネタリウムのドーム内の渡り鳥の行動，生理等に関する研究。小型電燈，テレメーター着装による行動追跡調査，など)。

鳥の渡りに関するこうした調査や研究の成果によって，今まで知られなかった渡り行動の未知の部分が次々と解明されつつある。そのなかで，鳥類の渡りのパターンに関し，明らかにされたいくつかの事実を次に述べてみよう。

渡りのいろいろ

1　渡りのパターン

渡り行動は，高緯度地域に繁殖する鳥類に，もっとも顕著に見られるが，生息地が熱帯地域に限定された鳥にも，かなり見られる。定期性は渡り現象の一特性であるが，その定期性にも鳥類によって程度の差があり，毎年のシーズンに1,2週間と違わぬ日に元の場所に帰るツバメやツル類などから，数年の周期で渡ってくるベニヒワ，シロフクロウなどまである。また同一鳥類の鳥でも，個体群により，さらに個体群のなかの個体ごと，あるいは雄雌によって，渡りコースや渡り先にかなり相違が見られる。

2　地域的渡り

海岸からあまり遠くない内陸で繁殖，冬期採餌場の海岸にやってくるものなど，渡りの時期や方向は決まっているが，距離が短く，せいぜい200～300キロの短距離を渡るものをいい，日本のヒヨドリ，カケス，ムクドリ，ウグイス，スズメなどにしばしば見られる。

地域性渡りのひとつともいえるもので，高山で繁殖し，繁殖期外に山麓に垂直移動するものがあり，ホシガラス，ウソ，カヤクグリなどにこの種の渡りが見られる。また反対に標高マイナス300メートルの谷底の繁殖地から，冬期に気候がいっそう寒冷な周辺丘陵地に移動するものが，死海地域に幾種かいる。さらにおもしろいものでは，熱帯の小島に生息するツカツクリの一種で，ふつうは島の標高800メートルほどのところで生活するが，繁殖期に雌だけが急峻な傾斜面をおりて海べりにいき，産卵して，また元の山地にもどる。そしてひなは地熱で孵化したのち，自力で山にのぼる。

3　遠距離の渡り

高緯度の繁殖地から低緯度の越冬地まで，何百，何千キロの長距離を渡るもので，ハクチョウ，ガンカモ，ツバメ，ムシクイ類，その他多くの鳥類に見られる渡りである。このうち，ハシジロビタキのようにアラスカやシベリアなどで繁殖し，アジア，ヨーロッパの両大陸を横断したあと南下し，アフリカ中央部まで行って越冬するというものもある。また北アメリカのノドアカハチドリは体重わずか数グラムの超小型鳥だが，この鳥はメキシコ湾の海上800～960キロをノンストップで横断し，南アメリカ海岸にまで渡る。アメリカ合衆国のある科学者が，研究室でこのハチドリの代謝機能試験を行ない，この長い距離を飛べるだけの燃料（脂肪）をその小さなからだに貯蔵することはたぶんできないはずだ，という研究報告をした。しかしノドアカハチドリはこの報告を知ってか知らずか，この長距離ノンストップ飛行を毎年2回敢行している。

4　赤道越えの渡り

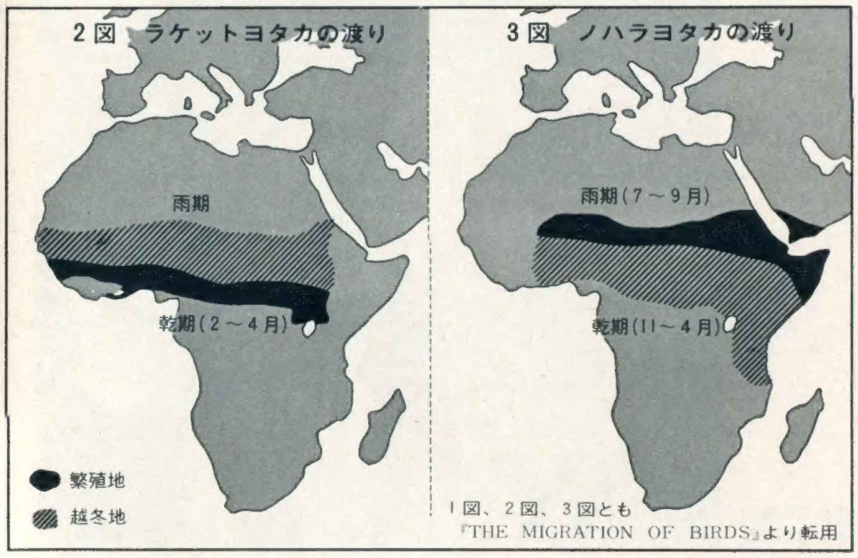
北半球の繁殖地から赤道を越えて南半球の越冬地まで渡る，あるいは反対に，南半球から北半球へ渡るタイプで，もっとも遠距離性の渡りがこのタイプに属する。この種の渡りをするものではキョクアジサシがもっとも知られている。

この鳥の繁殖地は北極圏の北緯82度の線まで達し，また越冬地は南極海の南緯74度に及ぶ。その間の距離は1万7600キロ。たいへんな長距離を毎年往復するのである。わが国に渡りの途中立寄るキアシシギも北のシベリアで繁殖し，赤道を越えてオーストラリアなどで越冬する大旅行者である。またハシボソミズナギドリ（1図）はタスマニアで繁殖して，春に日本近海およびベーリング海まで北上，さらに北アメリカ近海を回って帰る。このほかハイイロミズナギドリ，アカアシミズナギドリも南半球から北上し，日本近海で越夏する。

5　気候順応的渡り

アフリカのセネガルからケニアまで，赤道の北側にそった湿気の多い森林帯で繁殖するラケットヨタカの繁殖期は2月から4月までの乾期である。この鳥は雨期にはいる4月に，北方の乾燥地に渡る（2図)。ところが別のヨタカの一種（ノハラヨタカ）はこれと全然別の渡り行動をとる。この鳥の生息分布はスーダンから紅海，ケニア，北ゴンゴ，カメルーンにいたる地域であり，繁殖地域は生息分布地域の北部乾燥地に限られる。ただし，その繁殖時期は7月から9月の雨期である。そして11月から翌年の4月までの乾期に湿気の多いカメルーンや北コンゴにいって越冬する（3図)。つまり，このヨタカ2種は同じ目的地に向かっていっしょに渡りをする期間があるが，一方はこれから"繁殖地"に向かう途上であり，他の一方は繁殖を終えて，"越冬地"に向かわんとしているのである。■

（山階鳥類研究所標識研究室長）



1図、2図、3図とも『THE MIGRATION OF BIRDS』より転用

カラーページ解説

テリトリー全面積の4分の3も含んでいたふたつがいとも2年間繁殖に成功せず，逆にⅣの面積が多く，ヤチネズミの密度が非常に高いテリトリーの所有者も繁殖を試みなかった。つまり裸地の面積だけでも，またネズミ類の高密度だけでも繁殖に成功する保証にはならない。現実に2年とも繁殖に成功したつがいは，ひとつの型にかたよらず，4つの型が斑状に，しかもじゅうぶん入り混じっていたテリトリーの所有者だった(図2)。

そこで，結果をさらに分析してみると，ネズミ類の活動する場所とフクロウが狩りをする場所は裸地と下ばえとの境を接した部分であることがわかった。だから，そのような周辺部を多く含む，したがって各型が斑状にじゅうぶん入り混じっているようなテリトリーが，そのつがいの繁殖にとって，もっともよい保証を与えるこることになり，さらに2種のネズミ類の数が年によって著しく変動するために，ある年には一方のネズミだけに依存しなければならなくなることを考えると，4つの型が斑状にじゅうぶん入り混じっていることは，ますます重要な意味をもつことが理解できるだろう。

以上，モリフクロウのえさと繁殖結果についてサザンの研究を紹介してきた。昆虫食の小鳥類については，前にも述べたような理由により，じゅうぶんな研究例がない。しかし，テリトリーと繁殖結果について，とくに天敵に対する巣の保護と営巣場所，ひなが小さい時期の巣とえさ場所との近さなどの面では，どのようなテリトリーをもつかによって，繁殖結果に影響があるという情況証拠は知られている。鳥が，どういう場所にすみつくかは，その個体にとってはもっとも大きな問題のひとつなのである。■

（浦本野外動物研究会会員）

漢字のふるさと　65

藤堂明保



鴛鴦（おしどり）　ペアをなして仲よく水辺に浮かんでいるので，昔から「匹鳥」とも呼んで，夫婦の情愛のシンボルと考えられている。周の幽王の婚姻をとらえて，『詩経』では「鴛鴦梁（はり）にあり，その左翼を戢（おさ）む。君子万年，その嘉福に宜（よろ）し」と歌っている。またダブルベッドのふとんを鴛鴦被といい，唐の玄宗～楊貴妃は，その宮殿を鴛鴦瓦でふかせたという。白楽天が「鴛鴦の瓦冷たくして霜華重し」（長恨歌）といったのは，楊貴妃なきあと，零落した玄宗の独りねの寂しさを歌っているのである。

さて鴛という字は「夗（エン）＋鳥」からなっている。夗とは，ふたりの人が体をまるくかがめた姿を描いた字で，しなやかで丸みをおびている，という意味を含んでいる。丸い曲線で囲んだ花ぞのを苑といい，丸くしなることを宛転（エンテン）という。オシドリは全体に丸く，しかも首をしなやかに曲げて羽の間につっこんで休む。それに着目して鴛（エン）といった。

また鴦は「央＋鳥」からなっている。央とは，人間の首のあたりに枷をはめてぐっと押しさげた姿である。中心を押さえてくぼめる，中がへこんで低いという意味である。オシドリは上から押さえたように背が低い。そこで鴦といった。だから鴛鴦と重ねると，「丸くしなやかで背が低い鳥」という意味を表わすことになる。まさにオシドリの特色をいい表わした呼び名である。■



小鳥の呼吸器病

〈問〉 8年半も飼った手乗りブンチョウを亡くしました。飼育中に大阪，三重，鳥取，京都，大阪と汽車旅や車旅を重ねましたが，1週間くらい前から呼吸のたびに，心音か肺音かわかりませんが，ゼゼゼと音がしはじめ，食べるようすに変化はなかったのですが，朝，つぼ巣の中で死んでいました。何か手当の方法があったのでしょうか。今後のためお教えください。



（堺市・北風綾子・46歳・主婦）

〈答〉 ご質問のようすでは飼育環境に問題があったのではないかと思われます。



近ごろ，カナリア，ブンチョウ，ジュウシマツ，キュウカンチョウやインコ，オウムにいたるまで，呼吸器病がたいへん多く，多分に空気のよごれが影響していると思われるケースが多いのです。もちろん，呼吸器病の原因には，ビールス性，真菌性，などがありますが，これらの微生物が感染するには，それなりの条件が必要で，そのひとつに大気の汚染が関係していると思われます。

ブンチョウの場合には，上記微生物のほかに原虫の寄生によってぜんそくのような症状になる場合もあるので，治療にあたって必ずしも同じようにはまいりませんが，一応広範囲に効果のあるテトラサイクリン系の内服薬を飲水に混ぜて与えると効果のあることがあります。

日ごろの注意としては，長い間，日光に当てないこと，日が暮れるまで外に出しておかないこと，水浴は昼中にさせること，とくに車道に面しているところでは注意しなければいけません。また輸入したての鳥などは，ことに環境になれていないので，注意しないと，よく風邪をひきやすいものなのです。

セキセイインコに多いぜんそくは，甲状腺の機能不全による場合が多く，夜中や明けがたなどにヒューヒュー，ヒューヒューと苦しそうな呼吸を連続的に発します。甲状腺腫になると，ぜんそく症状とともに，食道を圧迫されるので，しばしば嘔吐を繰り返すこともあります。このような鳥にかぎって，日ごろ驚きやすく，急死することがあります。

5年以上たっている鳥が，たまたま甲状腺の血管腫や癌になることもあり，突然血を吐いて急死することもあります。こういう病気は，寒いとき多発する傾向があるので，注意が必要です。



死んだ鳥を解剖すると，平常はケシ粒大の甲状腺が，アズキ粒くらいにまで腫れていることが，よくあります。

こうした病気の治療法を簡単に述べておきましょう。

25〜30立方センチぐらいの飲水のなかに，毎日ルゴール氏液を1滴混入したものを3週間続けて与え，あと1週に2回ぐらいを同様数か月間投与するのがよいでしょう。発作を起こしている間は，できるだけ風に当てないよう，小鳥のかごの中の温度を20〜30度のあいだに保つようにしてやってください。■

（小鳥の病院院長）

裏表紙説明

広州動物園のパンダ　ここは総面積33万平方メートルで上野動物園の2倍半という大きさ。パンダ館もひろびろとしていて，北京動物園と成都動物園から2頭ずつ，計4頭の雌が贈られて飼われている。名まえはまだつけられていなくて，1号から4号まで。

飼育舎は冷房装置つき，屋根には噴水装置がついている。そのまわりは屋外運動場で，大きな池が掘られている。パンダは，長くて密生した毛でおおわれているために，体温を調節するには，近くに水があればそこへはいり，なければ呼吸数を急激に多くして体温の上昇を防いでいるらしい。パンダには水たまりが欠かせないのである。

パンダは1日のほとんどを食べているか寝ているかして過ごす。〝食っちゃあ寝〟の典型。

コワンチョウ（広州）は高温多湿で，竹林はいたるところにあるので，飼育を始めてから10年になるが，主食はタケであるという。■

撮影　石川朝日新聞出版写真部員



モズの早贄

東京の郊外・奥多摩地方の野では，モズの早贄が数多く見られる。

イナゴ，カマキリ，カマドウマ，カエル，ドジョウ，ハヤ，小鳥の頭，ヘビなどがある。珍しいものでは，ネズミのえさなどもあり，モズが早贄をしている現場も，しばしば見かけられる。



ネズミの贄
羽村町にて

しかし，その贄を食べているところを見たことがない。ところがその贄も，ひと夜明けていってみると，あとかたもなく消えていることもある。夜のことだから，モズがその贄を食べるとは考えられないのである。■

（東京都羽村町・岡董高・野鳥の会会員）



サクラの枝の
イナゴの早贄

次号予告

1月10日発売


トラフズク

世界動物百科
95号　1／21

カラーページ

フクロウ目　フクロウ科（つづき）

- モリフクロウ
- フクロウ
- カラフトフクロウ
- オオフクロウ
- キンメフクロウ
- コミミズク
- トラフズク

私たちの仲間

海からの使者（上）	藤原英司
ダンタ捕物帳　アマゾン動物記 7	伊沢紘生
フクロウ類の聴覚　カラーページ解説	樋口広芳
渡りの不思議 6　標識鳥の脚環は語る	吉井　正
漢字のふるさと 66　鶉（うずら）	藤堂明保

第65号～第128号（鳥類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100
TEL. 03－212－0131

朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530
TEL. 06－231－0131

朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802
TEL. 093－531－1131

朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460
TEL. 052－231－8131

世界動物百科　通巻95号　昭和48年1月7日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



オオパンダ　説明30ページ

雑誌　0632—1/7・14